

2021年度 3月修了 修士論文

バスケットボール競技におけるハーフコート
オフェンス戦術に関する歴史研究
-Flex Offense に着目して-

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 コーチング科学研究領域

5020A049-7

津谷 俊一郎

研究指導教員： 倉石 平 教授

目次

I . 緒言	1
1. バスケットボールにおける戦術	
2. 戦術の概念	
3. 現在のバスケットボールにおける戦術の潮流	
4. Flex の定義	
5. Flex を研究する意義	
6. 目的	
II . 研究方法	11
1. 研究対象	
2. 研究方法	
III . 結果・考察	13
第1章 新しいオフENSE 戦術 (Flex)	
第 1 節 オフENSE 戦術 (Flex) の考案者	
1. Reverse Action	
2. Tom Davis と Carroll Williams	
第 2 節 Tom Davis と Flex 考案の経緯	
1. Tom Davis	
2. Flex 考案の要因と目的	
第 3 節 Carroll Williams の Flex 考案の経緯	
1. Carroll Williams	
2. ビックマンの存在	

3. Flex の考案と要因

4. 当時の Broncos と他大学の身長把握

第2章 Flex の変革

第3章 Flex の変化・普及

第1節 どのように変化を遂げ、普及したのか

1. アシスタントコーチの存在

(1). Garry Williams

(2). Bruce Pearl

(3). Dan Fitzgerald, Dan Monson, Mark Few

2. 主要大会での活躍

3. “Steal” = “Study”

第2節 考案から未だに使用される理由

IV. 結論 59

V. 研究の限界 66

引用文献・参考文献

付録

謝辞

I. 緒言

1. バスケットボールにおける戦術

今日のバスケットボールの原型は、1891年にアメリカのマサチューセッツ州スプリングフィールドのYMCAにおいて、講師のJames Naismithが発明した³³⁾。バスケットボール競技は、またたく間に世界中に普及し、1932年に国際アマチュアバスケットボール連盟(The International Basketball Federation;以下「FIBA」と略す)が設立され³³⁾、現在世界各国から213の国内バスケットボール連盟が加入し、4億5000万人が競技者登録されている。バスケットボール競技は世界で最も普及したスポーツ種目である²⁶⁾。

バスケットボール競技において、ゲームの勝敗は、競技時間が終了した時点で得点の多いチームが勝ちとなる⁶⁷⁾。競技の争点が生点にあることから、ゲーム中に正確かつ、確率の高いシュートが求められる。プレイヤーが確率の高いシュートを放つためには、コーチがデザインするシュートチャンスを生み出す戦術が非常に重要になると考える。倉石(2005)は、「戦術・戦略はうまく使えばコーチの腕の見せどころ、最高の表現を出せるものだが、まちがえて策に溺れると、最悪の状態が出てくることにもなる。」と述べ⁴⁵⁾、戦術は使い方を身につければ最大の武器になりうるということが伺える。嶋田(1992)は、「戦略・戦術の準備をしないでゲームに出るチームは、決して勝利を得ることはないだろう。」と述べ¹¹³⁾、ゲームで勝利を収めるためには、戦術・戦略を準備しておくことは必要不可欠である。またいくつかの文献によってゲームで勝利をおさめるために戦術は重要であることが述べられている⁴⁰⁾¹¹²⁾¹³⁰⁾。

2. 戦術の概念

戦術・戦略とは元来、孫子やクラウゼヴィッツに代表されるような戦争用語として使われていたが現代では、ビジネス、政治的交、スポーツ場面でも用いられている³⁹⁾⁷³⁾¹⁰⁰⁾¹³¹⁾。戦争における戦術・戦略について論じる上では、用語の区別をする必要がある。なぜなら、戦術・戦略は時間的、空間的に互いに浸透しあっているが、本質的には異なった活動であるからだ⁹⁹⁾。したがって戦術・戦略の区別が必要であると考えられる。しかし、スポーツにおける戦術・戦略についてケルン（1998）は、「種目が違えば意味が異なり、人が違えば内容が違うというように、その概念を定義することさえままならない状況である。」と述べていることから⁴¹⁾、競技、コーチによって戦術・戦略は人によって定義が異なることが考えられる。内山（1995, 2007）は、戦術の概念について「「競争」という共通の特性を有しながらも、他の形態との峻別において、スポーツ科学の一領域としての競争を扱う戦術には「スポーツ戦術」という名称を充てる。」と述べている¹²⁹⁾。スポーツ戦術は、対峙する相手との駆け引きが求められる場において重要な概念である⁸⁶⁾。本研究の対象はバスケットボール競技のオフENSE戦術について調査することである。しかし、戦争の戦術・戦略をボールゲームの戦術・戦略として照らし合わせながら、ボールゲームの特性を当てはめている文献がいくつか見られる³⁹⁾¹¹²⁾。したがって、本研究では、内山の「スポーツ戦術」の概念をベースに、ボールゲーム、スポーツにおいての戦略・戦術の区別を参考（稲垣ら、1985；嶋田、1992）に戦術・戦略の定義づけをおこなった。

戦略（strategy）とは、勝利を獲得することを目的とした事前計画、指導方針であり³⁹⁾¹¹³⁾、戦術（tactics）とは、その場で最も適合す

る競争手段．つまり，相手を打ち負かすために何を行うか，どう行動するか
の攻撃手段や防御手段のこととした³⁹⁾¹¹³⁾¹²⁹⁾．

3. 現在のバスケットボール競技における戦術の潮流

嶋田（1992）は，「今日のバスケットボールの世界的な傾向は，より高く，より速く，より力強く，より高度な技術の土台を踏まえた上で，組織的な攻撃法と防御法が展開されるようになった．」と述べ，より高度な戦術が必要であることが考えられる．具体的には，アメリカ男子バスケットボールチームは，2008年の北京オリンピック以前は，インサイドにボールを集める，「アメリカン・バスケット」⁵⁰⁾という戦術を行っていた⁶⁰⁾．しかし，2000年以降ビックマンの不在などの理由から，この戦術ではアメリカは世界大会で苦戦を強いられるようになった．2008年の北京オリンピックから，従来のセンター中心の「アメリカン・バスケット」から運動能力を活かした「走る」「アウトサイドシュート」といったプレーを中心としたカットやLay-upなど，サイズが小さくても得点を取れる形に変化させ，アメリカの戦術戦略が一気に変化した⁶⁰⁾．現在では，北京オリンピックよりも高速化を辿り，従来のセンターらしいセンターが不利に働くよう考えられた戦術が潮流である⁶⁶⁾．倉石（2021）は，現代の戦術について「“大きなスペースを取らなければならない” “5人全員がリングに正対していなければならない” “シュート力がなければならない” ということになってきました．」と述べている⁶⁶⁾．ビックマンは，従来のようにゴール近くで勝負するのではなく，ゴール近くから離れたところでもプレーを展開しなければいけなくなったと考える．2013年頃には「スモールボール」という言葉が使われ，Golden State Warriorsの新たな戦術が注目された⁶⁶⁾．現在の

オフense戦術の潮流はポジションにとらわれることない、高速化されたバスケットボールであることが伺える。

このような潮流の中で、本研究で着目する”Flex Offense”（以下「Flex」と略す）は、1980年代に多く使われていた戦術であり¹³⁹⁾、誰もが知っている戦術である⁴⁸⁾。現在でも、National Basketball Association（以下「NBA」と略す）では、Golden State Warriorsが、オフense戦術の中にFlex、フレアスクリーン、ピンダウン、バックドアカットの要素など、パスとカッティングを多く取り入れたオフense戦術を展開している⁷⁸⁾。Toronto Raptorsには、Flexで成功した、新オフenseアシスタントコーチのTrevor Gleesonが加わった¹⁾。オーストラリアのNational Basketball League（以下「NBL」と略す）に所属する、Perth Wildcatsでも、Flexが取り入れられている¹²³⁾。前述したToronto Raptorsの新オフenseアシスタントコーチに就任した、Trevor GleesonはこのPerth Wildcatsのヘッドコーチを務めていた¹¹¹⁾。したがって、今後Toronto RaptorsでFlexが取り入れられることが示唆される¹⁾。他にもいくつかのチームでFlexの要素を含んだオフense戦術が展開されているのが現状である¹¹⁰⁾。

4. “Flex”の概要

Flexは、ミドルライン¹で、2メンサイドと3メンサイドのアライメントをベースとするオフェンス戦術である⁵⁹⁾。(図1)

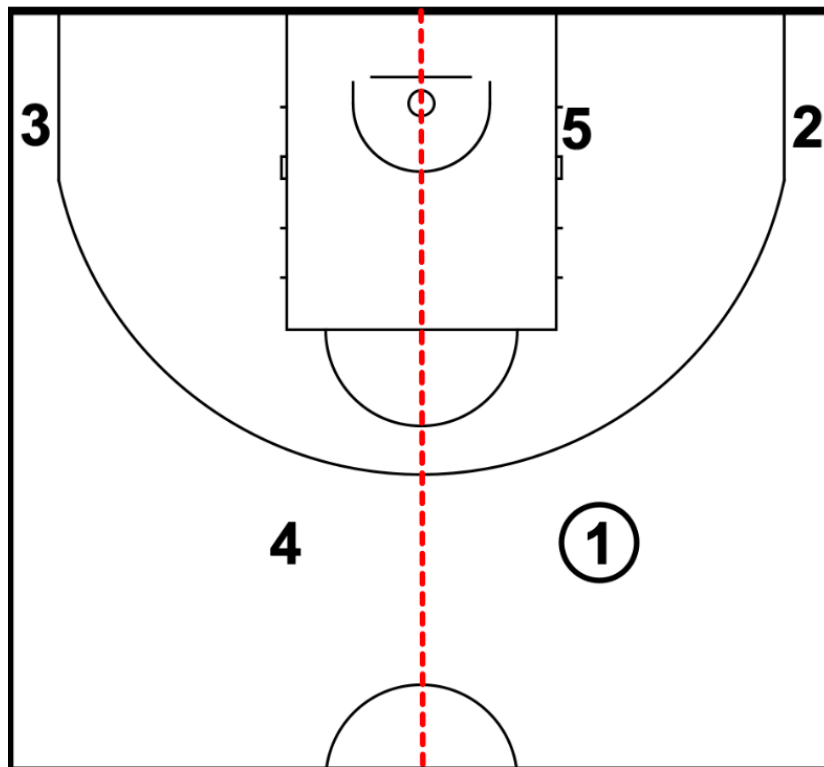


図1. Flexアライメント

¹ リングとリングを結んだ仮想の線(図参照)

#4がボールを保持してこのセットプレーは始まる．#5が#2のためにバックスクリーン²をセットする．#2はそのスクリーンを使ってゴールへカット，シュートチャンスを伺う．継続して#1が#5のためにダウンスクリーン³をセット，#5はスクリーンを使ってトップへ，#4は，#2そして#5のシュートチャンスを伺う．チャンスがなかった時に#5へパスしてこのプレーは続く．（図2）

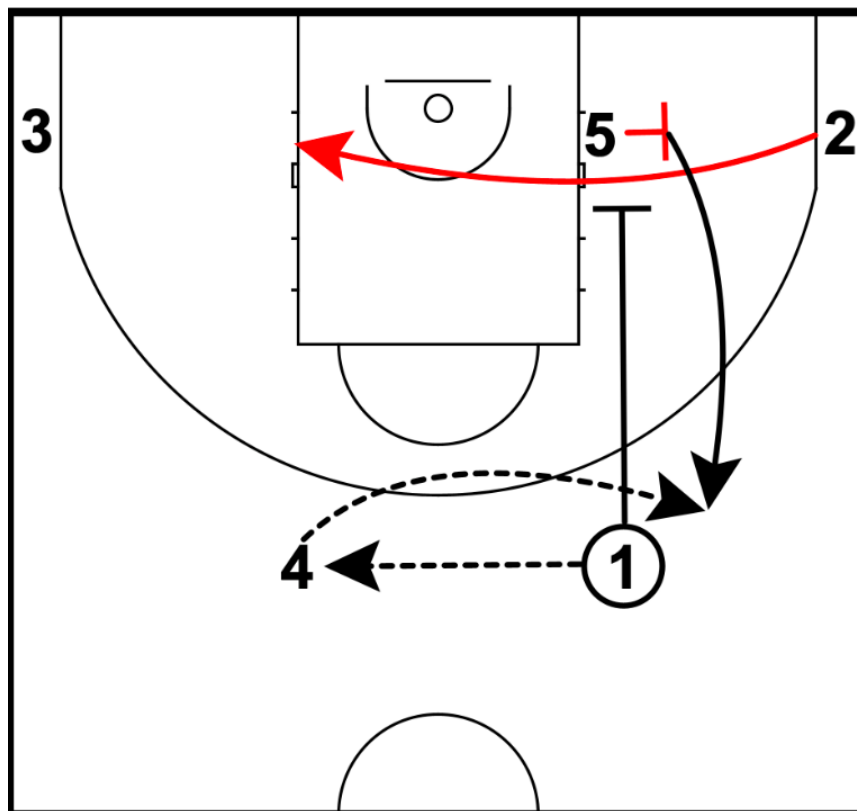


図2. Flex基本的な動き方(1)

² ディフェンスの顔が見えない真後ろからのスクリーンのことを指す．ゴール方向から外側へ，もしくはベースラインからミドルライン方向へセットするスクリーンのことを指す⁵⁸⁾．

³ ディフェンスは基本的にゴールに背を向けてディフェンスしている．ディフェンスから見えるように動くスクリーンのことをダウンスクリーンと呼ぶ⁶¹⁾．

同様に逆サイドでもスクリーンとカッティングを継続してチャンスを伺いながらシュートチャンスを狙う.この動きを継続することをFlexと呼ぶ⁵⁹⁾. (図3)

このオフェンス戦術はすべてのプレイヤーがシュートチャンスを創ることが可能である.そのため特定のプレイヤーだけをディフェンスすることが困難なオフェンス戦術である¹⁰⁷⁾.

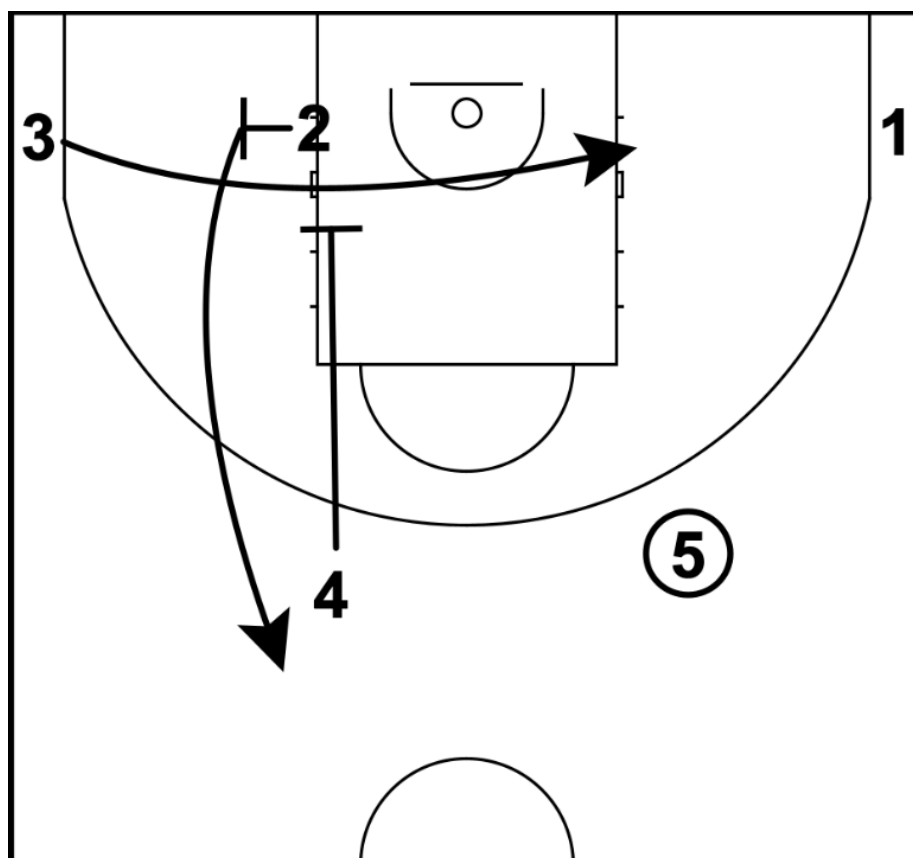


図3. Flexの基本的な動き方(2)

5. Flexを研究する意義

前述したように、Flexは、1980年代に多く使われたオフェンス戦術であり¹³⁹⁾、誰もが知っている戦術である⁴⁸⁾。世界の潮流を踏まえた上で、なぜ未だにこのオフェンス戦術が使用されているのか、明らかになっていない。そして、このオフェンス戦術は、誰によって考案され、どのように発展・普及したかについても明らかにされていない。

吉井（1987）は、Flexの考案についてアメリカのコーチに聞いたところ、「あるコーチは、それはピート・ニューウェルのリバース・アクションから発展したものである。また他のコーチは、それはラファイエット大学のトム・デービスが使用した。そしてその後、彼はメリーランド大学のブット・ミリカン・コーチのもとでそれを発展させたものである。また、サンタクララ大学のコーチ、キャロル・ウィリアムスはその創始者であるというものも若干ある。」と述べており¹³⁹⁾、当時のコーチでさえ、誰が考案したか正確に把握できていない状況である。未だに使用される戦術には何らかの理由があるはずだ。そのため、Flexの「本質」即ち、どのような目的も持ってこのオフェンスを考案したかを知るために、その土台となる考案者の調査と整理、考案要因と背景、その後の変革の調査する必要があると考える。また、Flexが考案されたと推察される時代は、ショットクロックがなかった。その背景がこのオフェンス戦術を生んだとも考えられるため、Flexとショットクロックルールの変遷の関係も調査を行う必要がある。

2004年アテネオリンピックでアルゼンチン男子チーム（以下「アルゼンチン代表」と略す）のコーチをしていたルーベン・マグナノは、Flexの魅力として、ユース世代の育成に必要な動きがいくつか組み込んであることを挙げている¹⁰⁷⁾。マグナノ（2013）は、「ゴールに正面

を向いている場合でも，ゴールに背を向けている場合でも，コート
の様々な位置にいる全ての選手にとっていくつかのオフenseオプション
があるのだ．このオフenseは選手全員を関与させるのに最良の方法で
あり，またボールを持っているときのパス・シュート・ドライブといっ
た重要なスキルのみならず，ボールを持っていない時の動きを選手に教
えるためにも優れた方法だと思えた．」と述べている¹⁰⁷⁾．Flexは，シ
ステム上すべてのプレイヤーがオフense参加できる．したがって，ベ
ストスコアラーに頼らない，またはオフenseが得意でないプレイヤー
にもオフenseの機会が回ってくるため，育成には最適な戦術であると
考える．今後のバスケットボール競技における競技力向上や，バスケット
ボールのさらなる普及のためには，育成年代の強化は必須である．マ
グナノ（2013）が上記で述べていることから，Flexはユース世代に取り
入れるべき戦術であると考えられる．正しく指導をするためにはFlexの
予備知識を身につける必要がある．しかし，国内においてバスケットボ
ール競技の歴史的研究の成果は数多く見受けられるが⁶⁸⁾⁹⁵⁾¹²⁴⁾¹²⁵⁾¹²⁶⁾，技術史や国内のバスケットボール競技の発展史が
多いのが現状であり，Flexに関わらずバスケットボール競技における
戦術の考案や，発展に着目した歴史的研究は不足している．Flexのア
ライメントや使用方法について記載されている文献は他にもいくつも見ら
れるが³⁶⁾³⁵⁾¹⁰⁶⁾，Flexの考案された経緯など，Flexの本質に迫る文
献，研究等は国内外共に見当たらないのが現状である．そのため，Flex
の使い方だけでなく，歴史，本質を知る新たな知見を構築する史料が必
要であると考えられる．

6. 目的

本研究はFlexの考案，変革，現在までの変化・普及に至った経緯に着目，明らかにすることでFlexの新たな知見を得ることを目的とする．

そして，今後のバスケットボール競技における戦術を考案するための基礎と戦術史研究の一助となることを目的とする．

Ⅱ．研究方法

1. 研究対象

本研究では、Flexの考案、そして実際に戦術として使用した全米大学体育協会（以下「NCAA」と略す）に所属する男子バスケットボールチーム、そのコーチを対象とした。全てではないが、中心的な存在であったと思われるコーチを対象とした。

対象を選定した理由として、笈田ら（1991）は、「バスケットボールの普及・発展に貢献したのは全米の大学に追うところが多い。」と述べている⁸⁷⁾。バスケットボールは、アメリカ合衆国発祥のスポーツであり、現代のバスケットボールの普及や発展、正確な技術や新たな戦術の開発、ダイナミックなプレーなど⁸⁷⁾、バスケットボールの基盤を創ったのは、アメリカの大学に所属するコーチ達であると考えからである。

笈田ら（1991）の同様の研究で、「特に1930年代から60年代にかけてルール改正、オフENSE、ディフェンス技術の多様化など、バスケットボールが今日の隆盛の基盤を形成するような、飛躍的な進歩を遂げた時期。」と述べ⁹⁴⁾、61年以降に多くのコーチによって考案された戦術の基礎が数多く出現した⁹³⁾。大学ほど技術や戦術を進歩させた団体はなく⁸¹⁾、したがって、Flexを考案したのは、NCAAの大学に所属するコーチ達であると考え。バスケットボール競技の進化の一番の中心は、大学、NCAA Division Iであり、その進化を調査研究することが、不可欠だと考えた。

2. 方法

本研究では、3つの観点を調査研究対象とした。1つ目は、オフENSE戦術考案者の調査。考案した目的と要因。2つ目は、オフENSE戦術がなぜ変革したのか、変革せざるを得なかったのか。3つ目は、どのように変化・普及したか、なぜ同じ戦術が未だに使われ続けているのか。という考案、変革、変化・普及に着目して文献調査を行った。

本研究では、コーチング学系と文化領域系の2つの要素が含まれているため、論じ方をコーチング系と文化領域系の両地域から縦断的に考察しようと考えた。

Ⅲ．結果・考察

第1章 新しいオフENSES戦術 (Flex)

本章では、オフENSES戦術が誰によって、何を目的として考案したのかを述べる。

第1節 オフENSES戦術 (Flex) の考案者

Flexは、Pete Newellの”Reverse Action”が関係していると言われている¹⁹⁾²¹⁾⁷¹⁾⁹⁶⁾。彼は、1959年に大学体育協会男子バスケットボールトーナメント (NCAA Men’s Basketball Tournament; 以下「NCAA Tournament」と略す) 優勝、1960年ローマオリンピックでゴールドメダルを獲得し、殿堂入り(Hall of Fame)をした名將である¹¹⁾。Flexは、前述したPete Newellが考案したReverse Actionから考案したオフENSES戦術である¹⁹⁾²¹⁾⁷¹⁾⁹⁶⁾。

なぜ考案したのだろうか。それは、Pete Newellの考案したReverse Actionが進化、もしくは、オプションとして効果的であるため、ゲームで使われたのではないかと考えた。Reverse Actionが生まれる前までは、ボールサイドでしかプレーされなかった。ところが、Reverse Actionが考案されてからウィークサイドからのとび出し(ボールサイドへのオフENSES参加。しかも、突然オフENSESに加わるためディフェンスが仕掛けづらい。ディフェンスしづらくオフENSES効率が高まった。)などで、相手を翻弄することになった。このReverse Actionが今後のオフENSESの様相を大きく変えたと考えられる。

1. Reverse Action

2ガードポジションと3人のポストのアライメントから始まる．ボールサイドの#3がウイングへポップアウト．#1からパスを受ける．（図4）

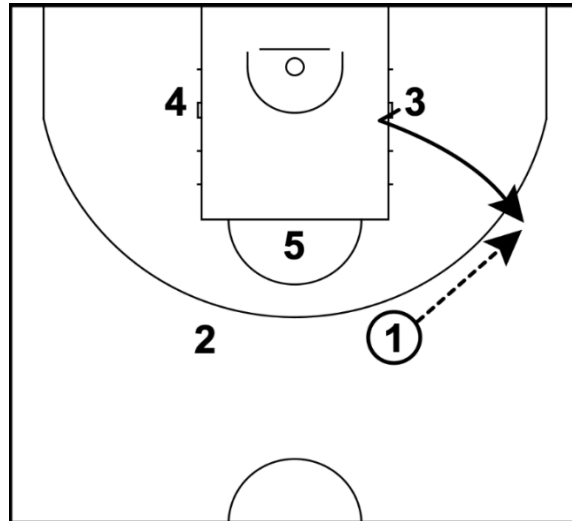


図4. Reverse Actionのアライメント，動き方（1）

#1はコーナーへ，同時に#5は，ハイポストからローポスト付近へ．#2はトップへ移動．#3は#5のポストアタックのチャンスを伺う．（図5）

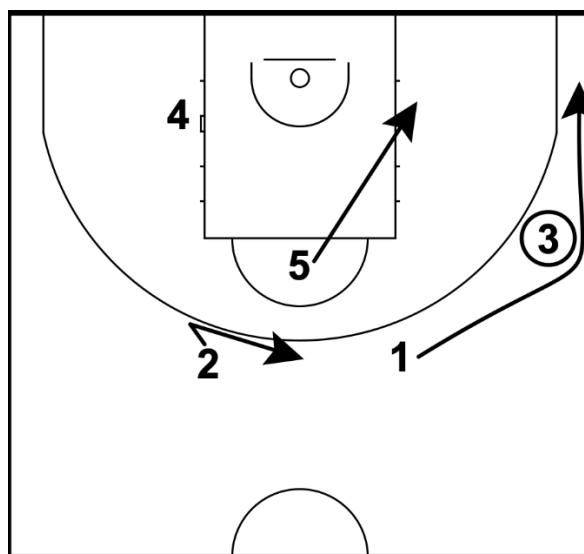


図5. Reverse Actionの動き方（2）

#3は、#2にボールを展開．同時にボールと逆サイドの#4は、ウイングへポップアウト、#2からパスを受ける．（図6）

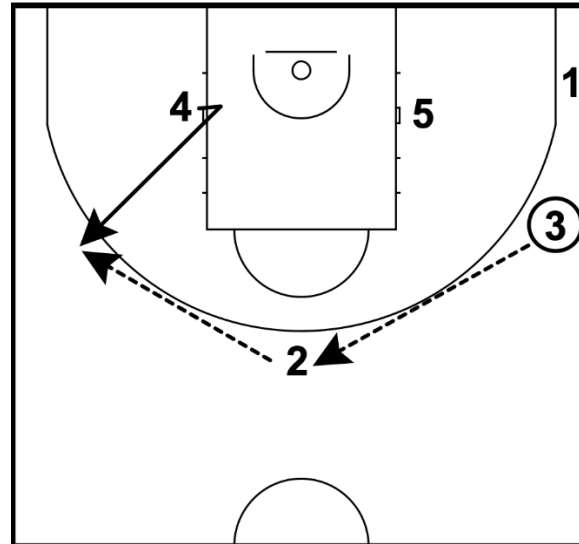


図.6 Reverse Actionの動き方（3）

#2はボールサイドのコーナーへ、同時に#5は、#3にバックスクリーンをセット．#3はそのスクリーンを使ってゴールヘカット．#4は#3のシュートチャンスを伺う．#1はトップヘ移動．（図7）

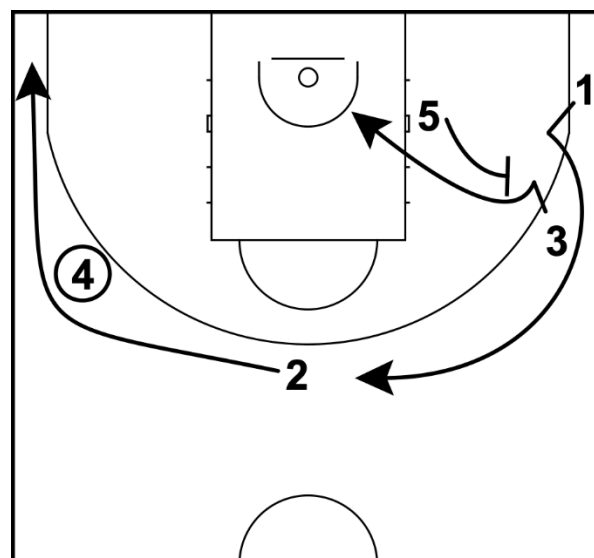


図7. Reverse Actionの動き方（4）

Reverse Actionは、別名「カリフォルニア・リバー・オフense」¹³⁸⁾とも呼ばれている。創案したコーチの名前や、プレーしたチームの名前がつけられている攻撃法は、ほとんどが本質的に良いものが含まれている攻撃法か一大流行した戦術法である¹³⁸⁾。吉井(1985)は、「それゆえ反対から言えば、この種の攻撃法を年代順に並べて検討すれば、ほぼアメリカのバスケットボールの攻撃法の発達・変遷がどのようになされてきたか推察できるとも言える。」と述べている¹³⁸⁾。吉井の著書「バスケットボール指導全書2 基本戦法による攻防」(吉井, 1985)で紹介されている、コーチ名、チーム名などが戦術の名前になっているオフense戦術を調査したところ、Pete NewellのReverse Action前は、ボールサイドでのオフense戦術がほとんどであった。したがって、前述したようにこのオフense戦術ができるまでは、ボールサイドしかプレーされなかったことが考えられる。

図7のような、#5が#3にバックスクリーンをセット。#3はそのスクリーンを使ってゴールヘカットのような、ウィークサイドにいるプレイヤーがオフenseに参加することは、当時は革命的な動きであり、ウィークサイドがオフenseに参加する原型となったと考えられる。ダイアグラムや、ウィークサイドから飛び込んでくる動きなど、前述したFlexの動きと似ている部分がある。以上のことからFlexは、Pete Newellが考案したReverse Actionを元に考案されたオフense戦術ということの裏付けになると考えた。

2. Tom Davis と Carroll Williams

Reverse Action から Flex へ，戦術として考案したコーチが2人いた¹⁹⁾²¹⁾⁷¹⁾⁹⁶⁾．この2人は，同時期であり，話し合われたのか偶然かは，今回の調査で明らかにすることはできなかったが，東側で Lafayette College(1971-77)，Boston College(1977-82)，Stanford University(1982-86)，University of Iowa(1986-99)，Drake University(2003-07) でコーチをしていた Tom Davis¹⁶⁾¹²¹⁾．もう1人は，西側の Bay Area にある Santa Clara University(1970-1992) でコーチをしていた，Carroll Williams²⁸⁾である．彼らのゲーム戦術は，当時ルールの違いがあり，ショットクロックがなかったため(後述に詳しく述べる)，ほとんどのオフenseで，このFlexを使っていたと考えられ下記のように勝率をだした．

表1 Flex 考案のコーチ，勝率

考案者	大学コーチ歴	勝	負	勝率	経歴
Tom Davis	32年	598勝	355敗	0.627	Maryland asst(1967-71), Lafayette(1971-77), Boston College(1977-82), Stanford(1982-86), Iowa(1986-99), Drake(2003-07)
Carroll Williams	22年	344勝	274敗	0.556	Santa Clara(1970-92)

Tom Davis, Carroll Williams以外にもFlexを考案した人物の文献が存在した。嶋田（1992）は、「フレックスオフェンスは、Mel Gibsonによって考案されたものである。」と述べている。様々な史料を調査した上でこのように述べていることが推察される。私の調査不足であり、文献数が少なく、この史実の裏付けする史料を収集することができなかった。また、Flexは、Rene Herreriasというコーチが考案したという文献も見られた¹⁰²⁾。彼は、1960年代からUniversity of Californiaでコーチを務めていた。Pete Newellの下でプレイヤー経験と、アシスタントコーチの経験がある¹³⁵⁾。Rene HerreriasのFlexは、“Shuffle Offense”のバリエーションとして”Cha Cha”と呼ばれていた⁷⁵⁾。考案目的として、UCLAのセンターLew Alcindorをボールから遠ざけるために考案された戦術であるとされている⁷⁵⁾。Lew Alcindorは、1966-67シーズンから1968-69シーズンに大学でプレーしていた⁶⁾。したがって、この期間中に考案したことになる。前述したが、Rene HerreriasはReverse Actionを考案したPete Newellの下でプレイヤーとコーチの経験がある。したがって、Flexに類似した戦術を考案できた可能性が考えられる。しかし、Pete Newellの下でアシスタントコーチをした経験がある中で、Shuffle Offenseのバリエーションであることの関係性の史料、Shuffle OffenseがどのようにしてFlex(Cha Cha)に至ったかの史料等が少なく収集することが困難であった。したがって、本研究では、Tom DavisとCarroll Williamsの2人のコーチを中心にFlexの考案について論じる。

東西のコーチ，そして考案の地をアメリカ地図で示すと（図4）．
Pete Newell（緑），Tom Davis（青），Carroll Williams（赤）
のようにFlexが誕生した場所として東側沿岸と西側沿岸から誕生して
おり，両海岸にルーツがあることが伺えた．同時期に，西と東の両サイ
ドで現在のようなインターネット等の情報が発達していない頃に，同様
のオフェンス戦術が誕生するのは極めて稀な事であったと考える⁴．

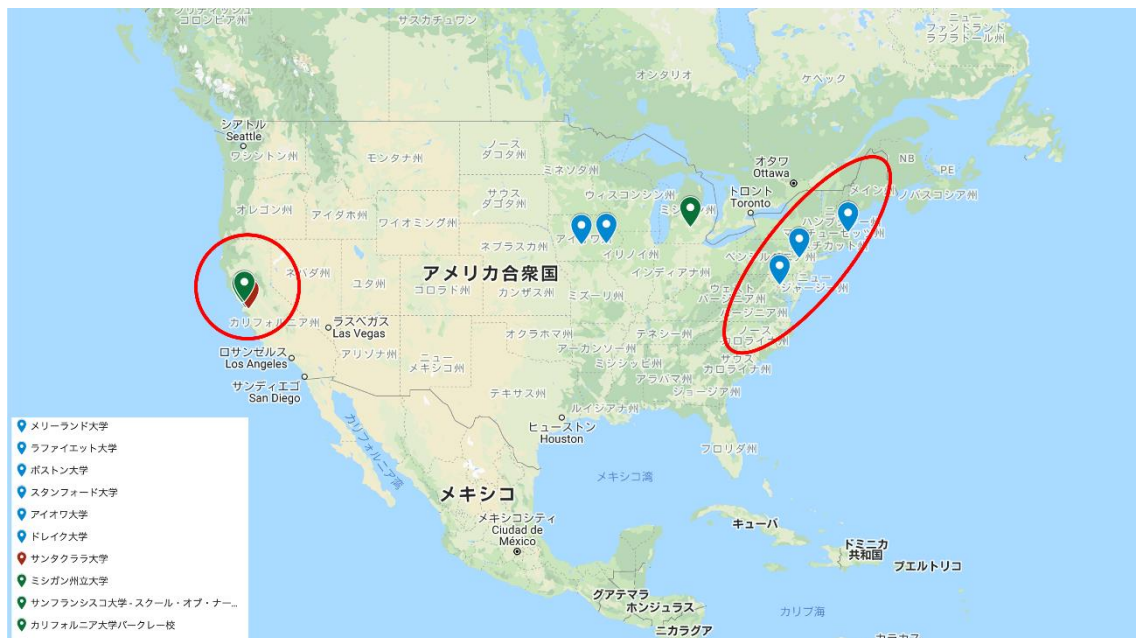


図4．各コーチ指導大学

⁴ 現在西と東の移動は大変であり，ビジネスマンは時間の効果的な使い方したいため夜行便を使う．そのため，「レッドアイ」などの呼び方も多い．そのくらい遠いのだ．当時の情報を鑑みると，考案に協働していたとは思いつらい．

東海岸でコーチをしていたTom Davisは、Pete NewellがコーチをしたUniversity of San Francisco(1946-50), Michigan State(1950-54), University of California Berkeley(1954-60)からは遠隔地でコーチをしていた。Pete Newellから直接Reverse Actionの指導を受けたと記載されている文献等は見当たらなかった。しかし、Pete NewellはReverse Actionを使用して、NCAA Tournamentで優勝した¹¹⁾。そのReverse Actionは全米中に知れ渡っていた⁵⁾と考えられる。Tom DavisがReverse Actionに触れたのは、1950年から67年までUniversity of Marylandでコーチを務めていた、Bud Millikanというコーチが、カレッジパークにPete NewellのReverse Actionを持ち込んだ²¹⁾ことがReverse Actionに触れるきっかけとして考えられる。

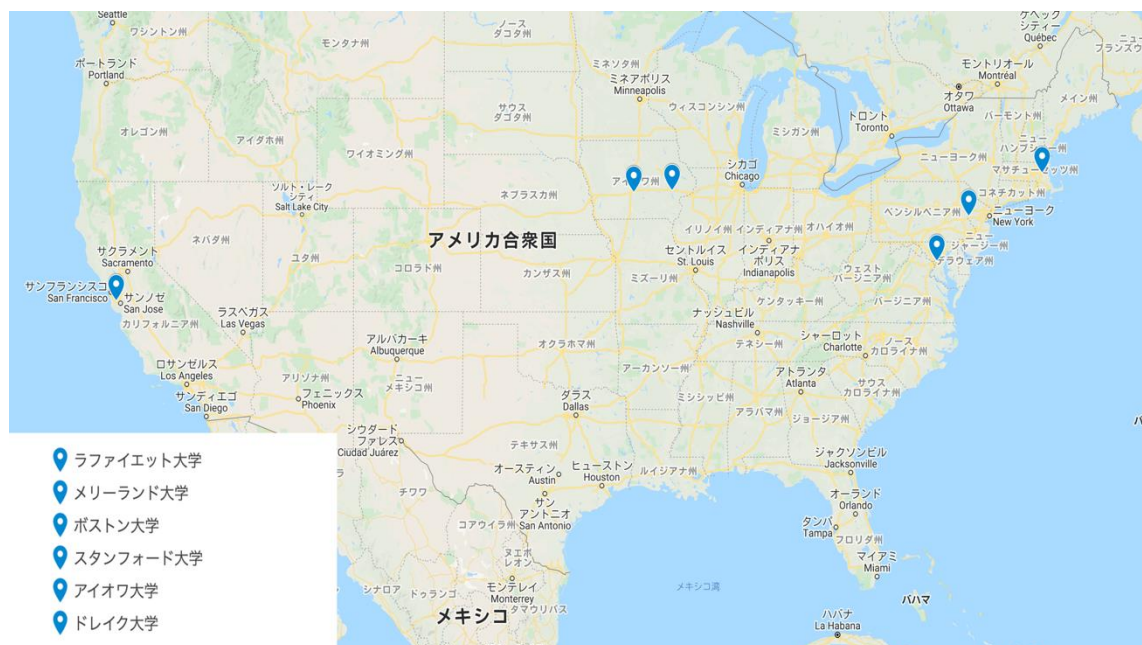


図5. Tom Davisがコーチした大学

⁵⁾ 現在チャンピオンチームは、戦術の進化を求めることを目的として公表すること(コーチ協会にて)になっている。当時もコーチ協会で、冊子で公表していたと思われる。

Carroll WilliamsがFlexを考案したとする背景は，下記の通りであり，私は，この文章，彼の言っていた言葉からPete Newellからの影響はとても大きかったと考えた．

西海岸沿いには，Pete Newell, Carroll Williamsがコーチをした大学が，同じ地区”Bay Area”にある．Carroll Williamsは，1960年のローマオリンピックで，Pete Newellがコーチの際に補欠に選出されている¹⁰⁹⁾．Santa Clara Magazine(2016)のインタビューでCarroll Williamsは，Pete Newellについて，「彼から多くのことを学びました．」と語っていることから¹⁰⁹⁾，Pete Newellに影響を受けたCarroll Williamsが，Reverse ActionからFlexを考案したのではないかと考えられる．また，彼らは，Bay Areaでコーチをしているため，地域のバスケットボール文化も関係していると考えられる．

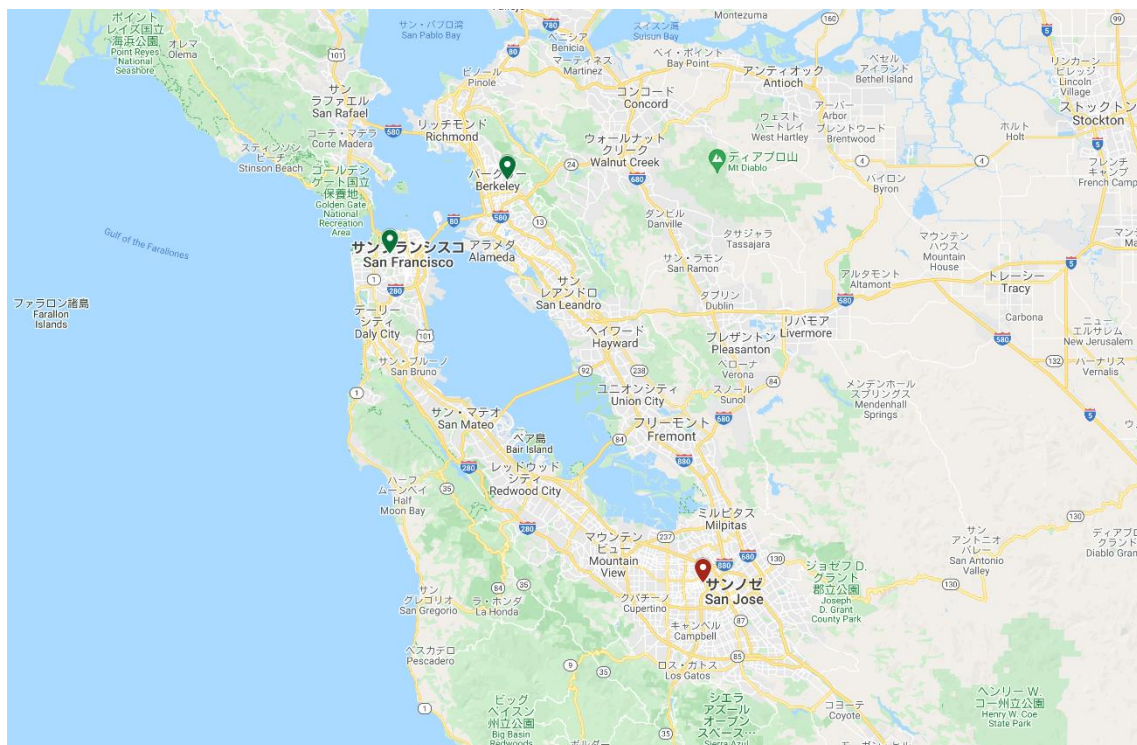


図6. Pete Newell, Carroll Williamsがコーチをした大学
(Bay Area)

第2節 Tom DavisのFlex考案の経緯

1. Tom Davis

コーチを始める前は、プレイヤーとして University of Wisconsin-Plattevilleにてガードとしてプレー¹⁴⁴⁾、1960年に同大学を卒業¹²⁷⁾、大学卒業後1961年から1966年まで、ウィスコンシン州ポーテージにある Portage High Schoolのコーチに就任¹⁴⁴⁾。その後、再び University of Wisconsinで修士号を取得、そして University of Maryland(1967-71)にてヘッドコーチ Frank Fellowsのもとでアシスタントコーチをしながら同大学で博士の学位を取得した¹⁴⁴⁾。そして、University of Marylandの Maryland Terrapins Men's Basketball Team（以下Terrapinsとする）で、フレッシュマンコーチ（新人、1年生）⁶⁾を担当した。

1969年、アシスタントコーチ2年目、彼の元でコーチのキャリアをスタートしたのが、Gary Williams¹³⁴⁾。グラジュエイトコーチ⁷⁾としてであった¹³⁴⁾。フレッシュマンコーチのアシスタントコーチとして加わった。そしてGary Williamsとともに、Tom DavisオリジナルのFlex（当初は”Regular”と呼んでいた）を考案、そしてゲームにて使われたとされている¹⁹⁾²¹⁾⁹⁶⁾。“Regular”とは、Bud Millikanが College Parkに導入したPete NewellのオフENS(Reverse Action)と、Tom DavisがWisconsinの小さな大学でプレイヤーとして学んだマンツーマンオフENSを組み合わせたものだった²¹⁾⁹⁶⁾。

⁶⁾ 当時は、フレッシュマン(1年生)は、レギュラーシーズンのゲームには出場できず、フレッシュマンリーグでプレーするレギュレーションであった。

⁷⁾ 学生コーチ、卒業してすぐのコーチで、プレイヤーなどのメンタル面、スキルなどのコーチ

Terrapins で 4 シーズン コーチ した 後 に , Lafayette College(1971-77)のLafayette Leopards Men's Basketball (以下「Leopards」と略す)のコーチに就任, Leopardsで通算116勝44敗, 勝率0.725の好成績に導いている⁷⁰⁾. 彼がコーチを務めた1年目の1971-72シーズンは, レギュラーシーズンを21勝6敗の成績で終え, 15年間つづいているポストシーズン・トーナメントへの出場権を獲得, National Invitation Tournament⁸(以下「NIT」と略す)にも出場した⁶⁹⁾¹¹⁴⁾.

Gary Williams (Tom DavisとともにRegularを考案) は, University of Marylandでビジネスの学士を取得, ニュージャージー州カムデンにあるWoodrow Wilson High Schoolでアシスタントコーチとしてコーチのキャリアを続けた¹³⁴⁾. Gary Williamsは, 1972年にTom Davisの誘いを受け, Leopardsのアシスタントコーチに就任. その後, Boston College Eagles Men's Basketball Team (以下「Eagles」と略す)で1年だけアシスタントコーチを務めた²¹⁾¹³⁴⁾. Tom Davisは, コーチをしたEagles, Stanford University Cardinal Men's Basketball Team (以下「Cardinal」と略す), University of Iowa Hawkeyes Men's Basketball Team (以下「Hawkeyes」と略す)といった就任した各大学でFlex(Regular)を戦術として使用していた²¹⁾.

⁸ NCAA Tournament 出場, 次のランクのチームが出場できるトーナメントがNIT. この大会に出場できることも名誉なことである.

2. Flex考案の要因と目的

The Baltimore Sun(2003)のインタビューでGary Williamsは、Flexについて「このゲームの好きなところは誰でもどんなポジションにも入れるということだ。」と語っており²¹⁾、どんなにプレイヤーを交代させても人的要因(個人差異、身体的、運動的)に左右されにくいオフense戦術であったのではないかと考える。大学でコーチの職に就く前の1961年から1966年までウィスコンシン州にある、Portage High Schoolでコーチを務めていた際に、Tom Davisは、プレータイムシェアにジレンマを感じていた¹⁴⁴⁾。彼は多くのプレイヤーに、チャンスを与えたかった。このようなフィロソフィーから大学では、その対応策として、ディフェンスでは相手チームに常にプレッシャーを掛け、ベースラインからのフルコートディフェンスをベースとした。オフenseでは、誰でもどんなポジションに入ることができるFlex(Regular)を考案してゲームで使用、頻繁にプレイヤーを交代する戦術を特徴とした¹⁴⁴⁾。Tom Davis独自のエキサイティングでアップテンポなバスケットボールフィロソフィーを生み出した¹⁰⁴⁾¹⁴⁴⁾。このフィロソフィーによって、アグレッシブなディフェンスで、常に相手にプレッシャーをかけ続けることで、相手はボールを前進せざるを得なくなり、ミス誘発させる、もしくはボールを奪取することができる。強気に前からプレッシャーをかけてディフェンスするため、時には突破されてイージーシュートを決められる時はあるが⁶⁵⁾、ゲームのテンポは上がるため、強制的に攻撃を促すようにしたのではないかと考える。オフenseではFlexを使用。シュートのチャンスが来るまでスクリーンをセットし続けること、その結果相手ディフェンスは常に動き続け、スクリーンが左右前後から仕掛けられるため、コンタクト、スピードのリズムなどが異なり、コンタクト

したくないにも関わらず体のぶつかりあい起き、スクリーンをかわす動きや、スクリーンにコンタクトしてしまうことで多くのエネルギーを消耗したと考える⁴⁹⁾。アップテンポなリズムなため、自チームもエネルギーも消耗するが、相手は、戦い慣れていない異なるリズムであるため、消耗は大きかったと考える。疲労のあるプレイヤーは交代させることで、ゲームのリズムを途絶えさない戦術戦略を行っていたと考えられる。Tom Davisが多くのプレイヤーにプレータイムを与えたい気持ちが、Flexを作った要因と目的ではないかと考える。

第3節 Carroll WilliamsのFlex考案の経緯

1. Carroll Williams

Lincoln High Schoolを卒業したCarroll Williamsは、San Jose State Universityに入学、スタープレイヤーへの階段を登り始める、大学4年生時には、All West Coast Conferenceのファーストチームとオールアメリカンに選出されるほどだった²⁸⁾。大学卒業後、Blackford High in San Joseでコーチキャリアをスタートさせ、1963年にSanta Clara UniversityのSanta Clara Broncos Men's Basketball Team（以下「Broncos」と略す）のコーチングスタッフ、1971年にヘッドコーチに就任した¹²⁾²⁸⁾。NCAA Tournamentに1回、NITに4回、計5回のポストシーズン・トーナメントに導いた。Broncosでの歴史上最も勝利を収めたコーチとなっている。1992年にヘッドコーチを退いた後、2000年までアスレティック・レクリエーション・ディレクターを務め、Carroll Williamsの指揮の下Santa Clara Universityは、19個のカンファレンスチャンピオンに輝いた¹⁰⁸⁾。そして、Santa Clara Universityのスポーツプログラムが継続的に全米レベルで有名になるように指導をした経歴を持つ³⁴⁾。

Carroll WilliamsがBroncosのコーチングスタッフとして加入した当初のバスケットボール界は、1964年から1974年にかけてUCLA Bruins Men's Basketball Team（以下「Bruins」と略す）が、NCAA Tournamentで7連覇を果たしていた⁹⁾。

2. ビックマンの存在

当時のバスケットボール界は、ビックマンがゲームに欠かせない存在であり⁵⁶⁾、Bruinsに所属していた、Lew Alcindor⁹⁾（7フィート2インチ、225ポンド）が1966-67シーズンから1968-69シーズンに中心プレイヤーとして活躍した。彼は大学卒業後に進んだNBAで最多得点記録を持ち⁸²⁾、歴史上最も偉大なバスケットボールプレイヤーの一人である⁴³⁾。

彼は今から50年前の全米大学バスケットボール界で最も圧倒的な存在だった⁹⁾。Bruinsに所属した3シーズンで88勝2敗を記録し、1967シーズンは、30勝0敗、NCAA Tournamentも制覇し、その後の2シーズンはいずれも、29勝1敗であった⁶⁾。前人未到のNCAA Tournament 7連覇に貢献したこともさることながら、UCLA在籍時代の3年間の平均得点26.4点、リバウンド平均獲得本数15.5本、フィールドゴール成功率63.9%と驚異のスタッツを残している。驚異はスタッツだけにとどまらず、ルールをも変更させるほど圧倒的な力を持っていた。1967年から1976年までNCAAはダンクを禁止した²³⁾⁹⁷⁾。そしてダンク禁止¹⁰⁾を「Alcindor rule」と呼ぶ人もいた。⁴³⁾ 大井（2021）によると、「ルー・アルシンダー(後のカリーム・アブドゥルジャバー)の桁外れな得点を抑えるためと、ダンクは身体能力の高い黒人ばかりが多用するプレーであり、人種問題も絡んだゆえのルール変更だった。」と述べており、Lew Alcindorがいかにゲームを支配していたかが伺える。一方この時代は、黒人プレイヤーがスポーツを支配するようにな

⁹⁾ 2m18cm, 102kg

¹⁰⁾ NCAA バスケットボール委員会やコーチ達は、ゴールにボールを叩き込むことでゴールが壊れる、ゴールに向かってくるプレイヤーをブロックしようとして、怪我をする、オフenseとディフェンスのバランスが崩れると主張していた⁴³⁾。

り、コート内外でより大きな力を得るようになった時代であった⁴³⁾。Smith(2018)は、ダンクについて「彼らにとってダンクは、強さ、権威、自由の表現であり、反抗の行為となっていた。白人相手にダンクをすることは政治への抵抗を体現することになる。」と述べている⁴³⁾。故に、ダンクシュートは、その豪快さや、アクロバティックな面に目を奪われがちであるが、当時のアメリカの社会構造¹¹⁾に反抗をする黒人プレイヤーの表現の1つであったことが伺えた。Lew Alcindorは、黒人の旗柱的存在として、またリーダーとしてリスペクトされていた⁴³⁾。

Lew Alcindor以外にも当時のルールに影響を及ぼしたプレイヤーとして、1953-54シーズンから1955-56シーズンにSan Francisco Dons（以下「Dons」と略す）に在籍。6フィート9インチ、215ポンドのBill Russell¹²⁾が挙げられる⁵⁾⁷⁴⁾。Bill Russellは1956年のNCAA Tournament決勝のHawkeyes戦で、26得点、27リバウンド、20ブロック、3スティール（ブロックとスティールは参考記録）⁹⁸⁾。通算で20.7得点、20.3リバウンドを記録⁸³⁾。特にその守備力は圧倒的で、名将John Woodenは「カレッジ界でも偉大なディフェンダー」と評している⁹⁸⁾。Bill Russellの卒業後、NCAAはゴールデンディングのルールを設けたほどだった²³⁾⁹⁸⁾。他にも7フィート1インチ、275ポンドのWilt Chamberlain¹³⁾は、個人で1試合100点という偉業を達成した⁸⁴⁾、この時代のバスケットボール競技は、ビッグマンがゲームを支配しており、草創期のバスケットボール競技になくてはならない存在であった⁵⁶⁾⁹²⁾。

¹¹⁾ 1960年代頃のNCAAは、コーチ、ディレクター、管理者、ブースターなど、殆どが白人男性によって支配されている機関であった¹⁶⁾。大学バスケットボールはアメリカンの当時の権力構造を反映していた。

¹²⁾ 2m5cm, 97.5kg

¹³⁾ 2m15cm, 124kg

3. Flex考案の要因と目的

前述したように、ビックマンの存在がゲームの勝敗などに多大な影響をもたらした時代、Carroll Williamsのチームは若くて小柄であったため、ノンカンファレンスの相手とゲーム時、サイズの問題を解決するために彼はゲームを短くする方法を考えなければならなかった²¹⁾。当初彼は、プレイヤーにもっと構造的なことを望んでいた。こうしてできた戦術が”Rigid”という戦術である¹⁹⁾²¹⁾⁹⁶⁾。彼らはRigid採用時、Lay-in¹⁴⁾以外打たなかった²¹⁾。当時のNCAAルールは、ショットクロックルールがない。そのため、ディレイ戦術やストールオフENSE戦術が横行していた⁶²⁾⁶³⁾⁹⁰⁾。ディレイ戦術とは、あらかじめ決められたセットオフENSEの形をチームとして行い、オフENSE時間を費やし、決定的なシュートチャンスに至ってもシュートをすることなく行うチームプレーを「ディレイ戦術」と言う⁶²⁾。ディレイ戦術の目的として、相手を心身ともに疲れさせる、フラストレーションを溜めさせて自滅させることが目的である。「ストールオフENSE戦術」とは、ストーリングつまり、ボール保持をする。時間を使い、プレー時間を自らのオフENSEで費やす戦術。ボールを保持して勝ち逃げすることを目的としていた。または、負けているチームが、ゲーム終了間際までボールを保持し続け最後の一発逆転のシュートを狙うこともある。これは、バスケットボール競技の競争目的から逸脱したことになると思われる。

シュート成功確率が高いLay-inを放つまでパスとカッティングを繰り返し行い、「ゲームを短くする方法」つまり、自らのオフENSEで時間を費やす。それによって、相手にオフENSEの時間を与えないことを

¹⁴⁾ ゴール付近でシュートモーションに入り、ゴールの上からボールを落とすか、転がしてシュートを狙うことを Lay-in と言う。

目的として、またゴール下を支配するビックマンや、他地区の強豪チームに対抗するための戦術として、Flexの原型となる”Rigid”と呼ばれる戦術を多用した。勝利するために、自らのチームの特徴を活かすために考案されたのが”Rigid”ではないかと考える。

“Rigid”とは、直訳すると「厳格な」、「頑固な」（株式会社学研，2018より）という意味で、パターン・オフENSEを継続して行うコンティニュイティ・オフENSEだったのではないかと考える。パターン・オフENSEについて吉井(1987)は、「ある特定のフォーメーションから、特定のスコアリング・プレーで得点しようとする攻撃法を、私はパターン・オフENSEと言う。」と述べており¹³⁷⁾、コンティニュイティ・オフENSEについては、「1回のスコアリング・プレーの展開で、ショット・チャンスができなくともフォーメーションを構えなおすことなく、ただちに2回目、3回目とショット・チャンスができるまで、同じスコアリング・プレーを連続して展開することになる。このような攻撃法を、コンティニュイティ・オフENSE（Continuity offense連続的攻撃法）と言う。」と述べている¹³⁸⁾。Rigidの意味とCarroll Williamsがプレイヤー達に構造的なことを望んでいたことから、Rigidとは、オフENSEの動き方、プレーの仕方（戦術）、考え方、目的がチーム全員に浸透させる徹底されたオフENSE戦術だったと推察される。その後、パターン・オフENSEや、コンティニュイティ・オフENSEは、シュートチャンスを創るための戦術があり、プレイヤーが正確にプレーを実行しようとするあまり、シュートチャンスを逃すなど²⁰⁾、場面により状況判断を正しく機能させることに障害が出るときがある。さらに同じ動きを続けるとディフェンスが次の動きを読み易くなるため、オフENSEの展開が困難になったのではないかと考える。そこで、Carroll

Williamsは、The Baltimore Sun(2003)のインタビューで、当時について「私達はとても厳格で、みんなを悩ませました、しかし、シーズン後半になって私達がより良くなり、より成熟してきたので、私は、プレイヤー達にもっと柔軟性をもたせました。」と述べており²¹⁾、柔軟性をもたせたことからRigidが”Flex”と呼ばれるようになった¹⁹⁾²¹⁾。Flexは、Rigidのオプションだと推察される。Flexとは、「曲がる」、「柔軟」(株式会社学研、2018)として、Rigidとは対局の意味を言う表現であるからだ。Rigidを行っているときはLay-in以外のシュートを放たず、Flexを行っているときは、どこからでもシュートを放てるようにした¹⁹⁾²¹⁾。今までのRigidであれば、シュート方法がLay-inと限定されており、パターンや、シュート方法が分かっしまえば相手ビックマンは、ゴール付近から動く必要がなかった。だがLay-inの制約をなくしたことによって、どこからでもシュートが放てることによってシュートチャンスをより多く作ることができ、ディフェンスはゴール付近だけ守っているわけにはいかなくなってしまった。The Baltimore Sun(2003)でCarroll Williamsは、Flexについて「私は非常に構造的なパスゲームと呼んでいました、ディフェンスがなにか対策を講じない限り、ありとあらゆるカットが繰り出される。」と語っており²¹⁾、ゴール下にいたビックマンも外について行かざるを得ない、Rigidのオプション戦術としてFlexを考案したと思われる。Flexでは、Rigidのときよりも戦術を使用する目的と狙いが増え、相手チームのビックマンをゴール下から引きずり出すことができ、5人全員でシュートチャンスを生み出すことによって、確率の良いシュートを放つ機会が増えたのではないかと考える。

Carroll Williamsは、「FlexオフENSEの父」と呼ばれ、Flexの名

付け親として²⁹⁾³⁰⁾、現代でも使用されているFlexの動きや考え方を考案したと推察される。

4. 当時のBroncosと他大学の身長把握

Carroll Williamsが、若くて小柄なチームが、大きなプレイヤー相手に勝利すること。その戦術としてFlexを採用。その事実を確認することを目的としてサイズについて調査をした。調査内容は、当時のBroncosの調査と対戦したノンカンファレンスの大学を調査した。Broncosの1974-75シーズン、1975-76シーズンのロスターを調査、新入生、新加入プレイヤーの調査と、1975-76シーズンのBruins, Memphis State(以下「Tigers」と略す), Creighton(以下「Blue Jays」と略す)のロスターを調査、サイズとしてビックマンが在籍していたか調査をおこなった。

ビックマンの基準として、当時インサイド支配していたLew Alcindor, 7フィート2インチ⁶⁾, Wilt Chamberlain, 7フィート11インチ⁸⁴⁾であったため、本研究では、7フィート以上をビックマンと定義して以下に結果を示した。

表 2 1974-75 Broncos

ロスター

Player	Pos	Height	
Veste Robinson	F		
Glenn Hubbard	F	6'6"	198.1cm
Remel Diggs	C	6'8"	203.2cm
Jerry Bellotti	F	6'6"	198.1cm
Dan Malane	F		
Eddie Joe Chavez	G	6'1"	185.4cm
Jerry Piro	G	6'0"	182.8cm
Mark Bruening	C	6'8"	203.2cm
K.C. Jackson	G	6'4"	193.0cm
Mike Leslie	G	5'11"	180.3cm
Dave Wenig	G		
Ed McPheeters	C	6'10"	208.2cm
Doug Coward	G	6'1"	185.4cm
Rodney Hunn	G	6'1"	185.4cm

表 3 1975-76 Broncos

ロスター

Player	Pos	Height	
Korky Nelson	C	6'10"	208.2cm
Glenn Hubbard	F	6'6"	198.1cm
Dan Malane	F		
Mark Bruening	C	6'8"	203.2cm
Eddie Joe Chavez	G	6'1"	185.4cm
Roy Taylor	G	6'3"	190.5cm
Carl Pierce	F	6'7"	200.6cm
Steve McGee	F	6'5"	195.5cm
Rodney Humm	G	6'1"	185.4cm
Mike Leslie	G	5'11"	180.3cm
Robert Betts	F	6'8"	203.2cm
Myrt Easley	F	6'5"	195.5cm
Veste Robinson	F		
Dave Wenig	G		

1974-75シーズン、1975-76シーズンを比較して、1974-75シーズンから翌年のシーズンにかけて新入生、トランスファーなどチームに新しく加わったプレイヤー（赤字）は、14人中7人であり、チームの半分以上が新規にロスターに登録されたプレイヤーとなっていた。全員の身長を調査することはできなかったが、ポジションの登録がG、Fであることから、ビクマン級の身長があることは考え難い。1975-76シーズンの最高身長が、6フィート10インチ¹⁵⁾のプレイヤーしかおらず¹¹⁵⁾119)、2mを越えるプレイヤーも3人しかいないため、ゲームを支配するようなサイズのあるプレイヤーは在籍しておらず、Bruins, Tigers, Blue Jaysと比べてもプレイヤーの身長はあきらかに小さかったと考える。（表2.3）

¹⁵⁾ 208.2cm

表4 1975-76 Bruinsロスター

Player	Pos	Height
Richard Washington(NBA)	C	6'11" 210.8cm
Marques JoHnson(NBA)	F	6'7" 200.6cm
Ander McCarter(NBA)	G	6'3" 190.5cm
Raymond Townsend(NBA)	G	6'3" 190.5cm
Ralph Drollinger(NBA)	C	7'2" 218.4cm
Gavin Smith	F	6'6" 198.1cm
David Greenwood(NBA)	F	6'9" 205.7cm
Jim Spillane	G	5'11" 180.3cm
Brad Holland(NBA)	G	6'3" 190.5cm
Wilbert Olinde	F	6'7" 200.6cm
Brett Vroman(NBA)	C	7'0" 213.3cm
Roy Hamilton(NBA)	G	6'2" 187.9cm
Chris Lippert		6'5" 195.5cm

1975-76シーズンのBruinsは、7フィート2インチ¹⁶のRalph Drollinger、7フィート¹⁷の、Brett Hamiltonが在籍しておりビックマンが2人いた。どちらも大学卒業後はNBAにドラフト指名されている。ロスターの半分以上も、NBAに進んでいる¹²²⁾。常勝チームだけあって体格にも恵まれスター級のプレイヤーが多く在籍していた。(表4)

1975-76シーズンのBruinsは、NCAA Tournamentに出場し、FINAL4に残ったチーム¹⁴³⁾Indiana Hoosiers³⁸⁾¹¹⁶⁾、Michigan Wolverines¹¹⁷⁾、Rutgers Scarlet Knights¹¹⁸⁾と比較しても、NBAに進んだプレイヤーが1番多くプレイヤー層の厚さは大学一だったことが明らかだった。(付録、表7.8.9)

¹⁶ 218.4cm

¹⁷ 213.3cm

表 5 1975-76 Blue Jays

ロスター

Player	Pos	Height	
Randy Ecker	G	6'10"	182.8cm
Brian Long	G	5'10"	177.8cm
Robert Scrutchens	G	6'3"	190.5cm
Jerry Newell	G	6'0"	182.8cm
Cornell Smith	F	6'5"	195.5cm
Jhon C. Jhonson	G	6'3"	190.5cm
Paul Dinkins	G	6'5"	195.5cm
Kevin Kuehl	G	6'2"	187.9cm
Bruce Kucera	G	6'8"	203.2cm
David Wesely	F	6'7"	200.6cm
Rick Apke	F	6'8"	203.2cm
Tim McConnell	F	6'7"	200.6cm
Bill Butrym	C	6'10"	208.2cm
Daryl Heeke	F	6'8"	203.2cm

表 6 1975-76 Tigers

ロスター

Player	Pos	Height	
Alvin Wright	G	5'10"	177.8cm
David Brown	F	6'7"	200.6cm
Buster HanCook	G	6'0"	182.8cm
Bob Corn	G	6'2"	187.9cm
Dexter Reed	G	6'4"	193.0cm
Jhon Washington	C	6'11"	210.8cm
Jhon Gunn	F/C	6'9"	205.7cm
Bill Butcher	G	6'3"	190.5cm
Steve Meacham	F/C	6'8"	203.2cm
Jhon Kilzer	G/F	6'6"	198.1cm
Clarence Jones	G	6'6"	198.1cm
Marion Hilliard	C	6'9"	205.7cm
Bill Cook	G	6'5"	195.5cm
Ed Wilson	F	6'8"	203.2cm

1975-76シーズンのBlue Jays, Tigersは, どちらのチームも BruinsのようにビックマンやNBAに行くような才能のあるプレイヤーが記録上在籍していたわけではなかった。(表5.6)

しかし, Blue Jays 19勝7敗 Tigers 21勝9敗と, どちらも20勝近く勝利を収めている¹⁷⁾¹⁸⁾⁷⁶⁾⁷⁷⁾. ビックマンやNBAに進むようなプレイヤーは在籍していないが, 強豪校であったことが考えられる.

以上を鑑みて、1975-76シーズンのBroncosは、若くて小柄なチームであったことの裏付けとなる。Bruinsは、他のどのチームよりもプレイヤー層が厚くビックマンや、将来NBAに上がるプレイヤーが多く在籍していたことが明らかであった。Carroll Williamsが指導したBroncosとBruinsの体格差は明白であったが、1975-76シーズンのBruinsとの対決の結果は48-52と僅差での敗戦であった¹²⁰⁾。敗れはしたが体格差があったにも関わらずロースコアゲームで、接戦の試合に持ち込んでいることから、Broncosのペースでゲームが進められていたことが考えられる。このゲームは、シーズンの前半に開催されたこと¹²⁰⁾、当時のBruinsはテンポの速いオフenseと多様なバリエーションを持つオールコートゾーンプレスディフェンスを特徴とするチームであった⁹³⁾。最終得点がロースコアであることから、自チームのオフenseで時間を消費することを目的として、相手のオフense時間を減らすRigidを使用していたのではないかと考える。もしくは、ゲーム全体のテンポが遅いスローダウン戦術の中にRigidを取り入れていたことも考えられる。スローダウン戦術とは、相手がものすごく速いテンポでゲーム展開をしてくる場合に用いることが多く、意図的にゆっくりボール運びを行い、意図的にとゆっくり動いてスクリーンをかけるなど、相手にイニシアティブを与えないことを指す⁶²⁾。

Tom Davisが創ったFlexは、プレータイムシェアをすることを一つの目的とした。そして、誰でもどのポジションに入れるオフense戦術を考案した。したがって、自分のフィロソフィーを持って、自チームのために創った戦術であると推察される。一方Carroll Williamsが創ったFlexは、身体的、運動的に優っている相手に対抗する手段として、自らのオフenseで時間を消費して、相手にオフense時間を与えない、

Rigidを考案した。その後、プレイヤー達の戦術理解度が成熟してきたため、Rigidに柔軟性を持たせたオプションのFlexが考案された。故に、相手に対抗する手段としてFlexを考案したと考える。2人のFlex考案経緯から、戦術の目的に若干の差異がある。プレイヤーにプレーするチャンスを与えるため交代を頻繁に行う。そのため、誰がどんなポジションにも入れることができ、アップテンポな展開を創ることを目的としたTom Davis、チームの特徴（若くて小柄）を活かすために、オフェンスで時間費やすこと、ビックマンをゴール下から引きずり出すことを目的としたCarroll Williams。彼らは、Flexの目的が対局である。これはコーチングフィロソフィーの違い、地域でのバスケットボール文化の違いによって差異が生じたのではないかと考える。

“Regular”と”Rigid”のダイアグラムと、詳細な地域別バスケットボールの文化について記載すべき史料であるが、本研究期間、COVID-19の影響で現地に赴くことができず、行動制限や自由にコミュニケーションがとれない状況にあり、史料収集に限界があった。そのため、詳しいアライメント、動き方（戦術）等のダイアグラムの作成、より詳しい地域別のバスケットボール競技の文化と特徴等、そこを解き明かすことを含めて今後の課題としたい。

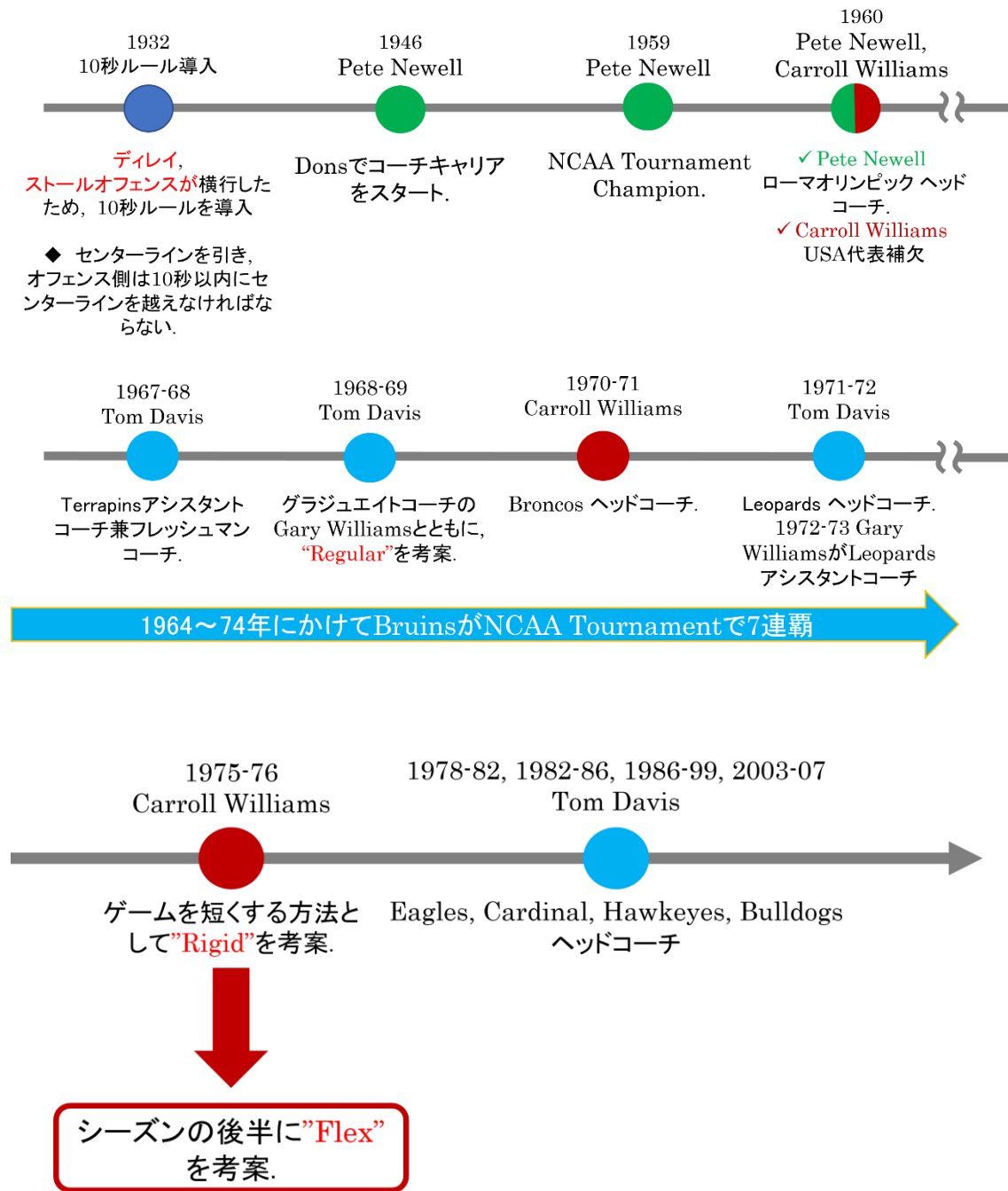


図7 Flex考案（コーチ）時系列

第2章 Flexの変革

第1節 Flexはなぜ変革したのか

本章では，時代が進むに連れFlexが3つの要因によって変革が起き，もしくは変革せざるを得なかったのではないかを述べる．

1つ目の要因として，ルール変遷が考えられる．1932年に観客を魅了するため，ゲームをより面白くするために，「10秒ルール」が取り入れられた²³⁾．大量のリードを奪ったときや，強固なディフェンスに抑えられると積極的なオフェンスが減少してしまい，リードしたチームがボールを回し続け，相手から逃げながら，時間を浪費するストールオフェンス戦術が横行した⁶³⁾．そのためゲームの面白さが半減したのである⁹⁰⁾．ストールオフェンス戦術とは，前述した通り1度リードしたチームが，その得点差をキープするために，ボールを奪いに来る相手をいなす，逃げることを目的として，パスを回してボールを保持し続けることで，2度と相手チームにオフェンスの機会を与えないという戦術である⁶³⁾．前述した「10秒ルール」は，コートにセンターラインを引き，オフェンス側は10秒以内にセンターラインを通過しなければ，相手にボールが奪われるルール変遷であったが⁹⁰⁾，これはセンターラインを超えることを強要するルールであり，シュートを放つことを強要するルールではなかったと考える．ゲームのテンポアップを目的として設定されたルールであるが，このルール変遷だけでは，問題の根本的な解決には至らなかった．NCAA委員会は試行錯誤の末，1985年に45秒¹⁸⁾のショットクロックを導入し（1993年には35秒に短縮），チームがボールをコント

¹⁸⁾ 教育的配慮が関与している．当時 NBA には，24 秒ショットクロックが，導入されていた．いきなり 24 秒にしてしまうと，プレイヤーは焦って，無茶苦茶なシュートを放ってしまう．45 秒は 24 秒の約 2 倍である．一度オフェンスに失敗しても，また組み立て直すことができる時間が 45 秒であったと考えられる．

ルールできる時間を制限した²³⁾。ショットクロックが導入された経緯として、上記に述べた、あらかじめ決められたセットオフenseの形をチームとして行い、オフense時間を費やす、決定的なシュートチャンスに至ってもシュートをすることなく、相手にフラストレーションを溜め、心身共に疲弊させるディレイ戦術と⁶²⁾、ストーリングつまり、ボール保持をする。時間を使い、プレー時間を自らのオフenseで費やす戦術。ボールを保持して勝ち逃げすることを目的としたストールオフense戦術⁶³⁾⁹⁰⁾がゲーム性を著しく損ない続けたことでショットクロックが導入された⁶³⁾。Flexは、シュートを放つために、シュートチャンスができるまで、デザインされたプレーを連続して展開するコンティニュイティ・オフenseであった¹³⁸⁾。そのため、従来であれば、シュートを確実に決めることができるタイミングまでスクリーンとカッティングを繰り返し、シュートチャンスを創ると同時に、相手に身体的・精神的ストレスを与えることができた⁵⁹⁾。ところが、45秒ショットクロックが導入されたことで、シュートチャンスにならずとも、45秒以内にシュートを放たなければ強制的に相手に攻撃権が移ってしまう。そのため、前述したディレイ戦術や、ストールオフense戦術の要素を入れ込んだ、コンティニュイティ・オフenseを展開することができなくなってしまった。自らのオフenseで時間を消費してオフenseを展開していたFlexが次第にその効力を失ってしまったのではないかと考える。

前述したことだが、より一層のゲーム展開の高速化やゲームをより面白くするために1993年にショットクロックが35秒に短縮され、より一層コンティニュイティ・オフenseの目的が見失うことになり¹⁰⁵⁾、使用の頻度も少なくなってしまったと考察する。笈田(1991)は、「ルールの変遷と、技術、戦術の発展には相互の関連が深く密接に結びついて

おり、両者が表裏一体の関係にあることが明らかとなった。」⁹¹⁾と述べている。故にFlexは、ルール変遷に影響を受け、変革せざるを得なかったと考える。

2つ目の要因として、相手チームのオフェンス戦術に対する慣れや、映像などのテクノロジーの発展が関与しているのではないかと考える。コンティニュイティ・オフェンスは、同じプレーを連続して行う¹³⁸⁾。そのため、相手ディフェンスに、次に起こるプレーを予想されやすいという欠点があり¹³⁸⁾、何回も行っていると相手に動きのパターンが読まれてしまい、オフェンスの展開がより困難になったからではないかと考える。内山(2012)は、「1980年代以降にテクノロジーの爆発的進歩によって、アメリカのバスケットボールは海外でもより身近になった。」と述べていることや¹³²⁾、吉井(1987)は、1980年代のFlexについて、「これは、アメリカのみならず、私の最近見た国際ゲームにおいて、多くのナショナル・チームによっても使用され、世界的に流行している攻撃法である。」と述べており¹³⁹⁾、世界中にFlexが認知された。映像技術やテクノロジー(情報伝達)が発達したことによって、映像調達が容易になり、他大学のスカウティングも容易になったのではないかと考える。それに伴いスカウティング力の向上にもつながったと考えられる。したがって、オフェンス戦術に対するディフェンスの戦術方法も発展し、ディフェンス力が向上した、そのためコンティニュイティ・オフェンスに限らず、オフェンス戦術の展開がうまくいかなかったのではないかと考える。

ディフェンス戦術方法の発展により、パターン・オフェンスやコンティニュイティ・オフェンスから考案されたのが、「フリーランス・オフェンス」である¹³⁸⁾。コーチの考えるオフェンス方法を型として図で示

していたのが、パターン・オフenseである。それに対して、フリーランス・オフenseは、コーチがプレイヤーに、期待する動きを「プレーの原則」として、言葉（言語、用語）で表現して指導するのが、フリーランス・オフenseである¹⁴⁰⁾¹⁴¹⁾。野老(1989)は、「アメリカのバスケットボールの歴史をみると必然的にフリーランス・オフenseが生まれた。それは情報化によるスカウティング力の向上、ルールの変遷、チェンジングディフェンスの発達などにより生まれてきた。」と述べている¹²⁸⁾。故に映像、情報伝達等のテクノロジーの発展がFlexや戦術全体の変革に関与していると考える。

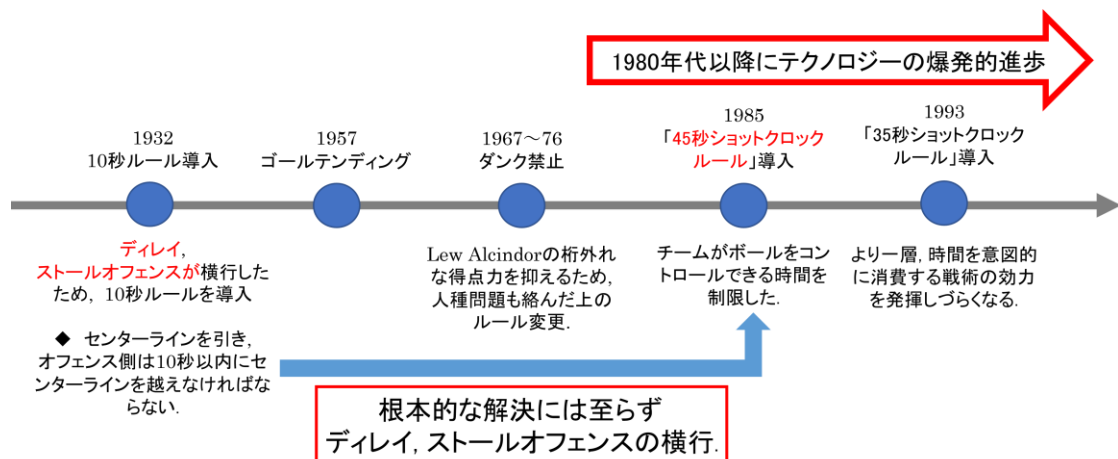


図8 Flex変革（ルール変遷）時系列

3つ目の要因として、人的要因（構成メンバーの要因）が関係するのではないかと考える。倉石(2003)は、戦術・戦略を立てるときのコーチの考え方として「まず、自らのチームの特徴を調べ、対戦する相手を調べ、そのうえで効果的な攻撃法・防御法を考案することが勝利につながる。」⁵¹⁾と述べており、嶋田(1992)は、「ゲームは、「力」と「技」の戦いだけではなく、「チームの個性」対「チームの個性」の戦いでもある。チームがゲームで勝つためには、チームの個性を活かした戦略・戦術が必要である。」¹¹³⁾と述べ、メンバーの特性を活かすチーム作りに取り組むことが必要である。具体的に示すと、Tom Davisは、Leopards, Eaglesの後に務めた、Hawkeyes, CardinalにもRegularを取り入れ、ポイントガード(以下「PG」¹⁹⁾と略す)の速攻の要素を加えるなど行く先々で手を加えている²¹⁾。したがって、Tom Davis独自のアップテンポなオフenseフィロソフィーは崩さず、チームと個人の特徴を見抜き、チームごとのオフense戦術を構築するために、変革したのではないかと考える。

人的要因の中のもう一つの要素として、ペリメータープレイヤー（外角のプレイヤー）の出現も関係するのではないかと考える。NCAAは、1980年代にNCAA Tournamentに出場するチーム数を24チームから更に拡大することを考えつつ、John Wooden以降のアイデンティティを模索していた⁸⁰⁾。同時にNBAもビックマンが活躍した時代から次なるスターを求めていた⁵⁷⁾。

そこで台頭してきたのが、Indiana State Sycamores³⁷⁾のLarry Birdと言う白人プレイヤー、そしてもう1人が、Michigan State Spartans⁷⁹⁾のEarvin “Magic” Johnsonと言う黒人プレイ

¹⁹ PG:司令塔の役割をするプレイヤーを指す。ポジション名(名称)

ヤーである。彼らはお互いに異なるプレースタイルであり、全米の話題となった²²⁾。Larry Bird²⁰⁾は身長6フィート9インチ、220ポンド⁷⁾。シューティングガード（以下「SG」と略す）からパワーフォワード（以下「PF」と略す）までこなす得点力のある、シューティングマシーンと言われたスーパースターである⁵⁷⁾。それに対してErvin “Magic” Johnson²¹⁾は、6フィート8インチ、215ポンド⁸⁾。長身にもかかわらずPGをしており、ボールコントロールが上手く、アシストを量産するスーパースターであった⁵⁷⁾。倉石(2014)は、「今までのビックマンの戦いからペリメーター(アウトサイドのプレイヤーを指す²²⁾)のプレイヤーへ、そして攻撃方法が華やかになった。インサイドの力のぶつかり合いといった様相から、速いそして華麗なプレイが多々見受けられるスタイルへと変化したのである。」と述べており、彼らが、サイズやポジションに関わらず、様々なポジションで、オールラウンドにプレーを展開したことで、その後のバスケットボール界のプレースタイルの変化を促した。同時に1980年代以降にMichael Jordan⁵⁷⁾といったペリメータープレイヤーの存在感が増していると考えられる。Larry BirdやErvin “Magic” Johnsonのプレースタイルに憧れ、オールラウンドにプレーできるプレイヤーが増えたのではないかと推察する。そのため、1980年代にかけて評価され¹³⁹⁾、誰がどんなポジションにも入ることができるFlexが多くの大学によって使用されたと考える。

各大学のメンバー構成や人的要因によって大学ごとに様々な変革と後の変化・普及をうながしたのではないかと考える。したがって、その時代に台頭してくるプレイヤーのスタイルや特徴にあった戦術に変革さ

²⁰⁾ 2m5cm, 99.7kg

²¹⁾ 2m3cm, 97.5kg

²²⁾ ペリメーターとは境界線(制限区域、ペイントエリア)のことを指す。

せることが必要であり，同時にルール変遷が戦術に与える影響，そして，テクノロジーなどの技術発達などのバスケットボール競技を行う上での環境要因などに影響され，Flexは変革したのではないかと考える．戦術は時代と共に変わるものであり，シュティラーら（1993）は，ボールゲームの発達段階について「ボールゲームの外観は特定の時代に見合った形をしており，そこに技術，身体的条件，資材などの具体的な現実が反映しているからである．」³²⁾と述べている．したがって，前述した要因と，それ以外の多様な要因によってFlexの変革が引き起こされたと考える．

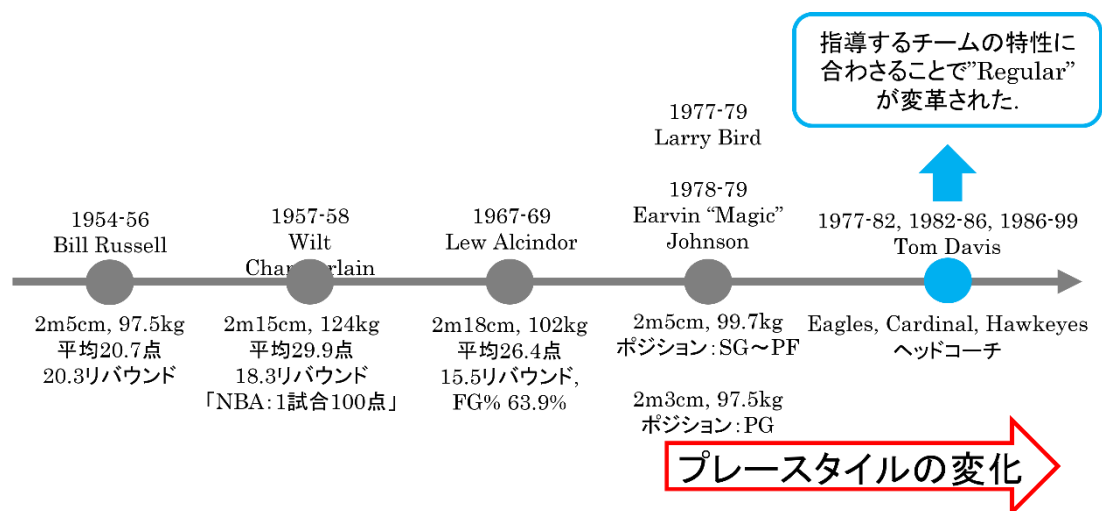


図9 Flex変革（人的要因）時系列

第3章 Flexの変化・普及

第1節 どのように変化を遂げ、普及したのか

Flexの誕生から時代とともにルール変遷，そしてプレイヤーなどの変化にアジャストするように変化してきた戦術であった．そのあたりの移り変わりを述べていく．

1. アシスタントコーチの存在

Flexを変化・普及させたのは，Tom Davisや，Carroll Williamsの元で学んだアシスタントコーチではないかと考える．なぜならば，バスケットボールの世界において，ヘッドコーチ，アシスタントコーチという家元制度に似た師弟関係が存在する⁸⁹⁾．筈田(1991)は，「アシスタントはヘッドコーチの指導のもとで，如何に指導すれば良いかを学び，ヘッドコーチの指導理念を伝承していくのである．」⁹⁵⁾と述べ，指導理念は，アシスタントコーチとしてコーチの下で働くことによって伝承される⁸⁸⁾．上記のことから，現代で使用されているFlexは，指導理念を継承しているTom DavisとCarroll Williamsのアシスタントコーチが変化，普及させたのではないかと考え，変化と普及をした要因の調査，考察をする．

(1) Gary Williams

Tom Davisの元でアシスタントコーチをしていたGary Williamsは、現代でFlexの最も有名な提唱者であり²¹⁾²⁷⁾、1978年にAmerican University Eagles Men's Basketball Team(以下「American Eagles」と略す)で初めてヘッドコーチに就任、American EaglesにFlexを持ち込んだ²¹⁾。その後、Eagles(1983-86)、Ohio State Buckeyes(1986-89)、そしてTerrapins(1989-2011)でもヘッドコーチを務め、2001-2002シーズンにTerrapinsで、NCAA Tournamentチャンピオンに輝いている⁸⁵⁾。Gary Williamsは自分にとってのロールモデルを質問された際に、Bud MillikanとTom Davisの名前を上げており²⁷⁾、Baltimore Sun(2003)のインタビューでGary Williamsは、「私達が心がけているのは、テンポの速いプレーにFlexを取り入れることです。」²¹⁾と述べている。またBud Millikanも、ディフェンス面でハードにプレーさせ、攻撃的なマンツーマンディフェンスを教える規律正しいコーチであった²⁷⁾⁴²⁾。Tom DavisとBud Millikanのアップテンポなバスケットボールを展開する指導理念を継承しながら、Flexに自分が納得できる要素を選んで、いくつかのプレーを追加している²¹⁾。Gary Williams独自のフィロソフィーを構築していることが考えられる。

(2) Bruce Pearl

Gary Williamsの他にもTom Davisにはアシスタントコーチがいた。Eagles時代にチームマネージャーを務め¹⁰⁾、Cardinal(1982-86)からHawkeyes(1986-92)の10年間Tom Davisの元で長年アシスタントコーチを務めていたBruce Pearl⁷²⁾もまたTom Davisの元

でFlexを学び、Tom Davisのコーチングフィロソフィーに影響を受けている²⁷⁾⁷²⁾。Bruce Pearlは、Tom Davisのもとを離れた後、ディビジョンIIのUniversity of Southern Indians(1992-2001)のScreaming Eagles Men's Basketball (以下 Screaming Eaglesと略す)でヘッドコーチを務め、1995年にFlexを使用してDivision IIのNCAAチャンピオンになっている¹⁰⁾¹³⁾。そして、Bruce Pearlもまた、アップテンポでフロントコートからプレッシャーをかけるチームであり⁴⁾、Tom Davisの指導理念を継承しつつ、Flexを現代のルールやスタイルに合わせた”Cutters”というシステムを考案している⁷¹⁾。現在は、Auburn Tigers Men's Basketball Teamでヘッドコーチをしており、2018-2019シーズンのNCAA Tournamentでは、Final4に進出している¹⁰⁾。

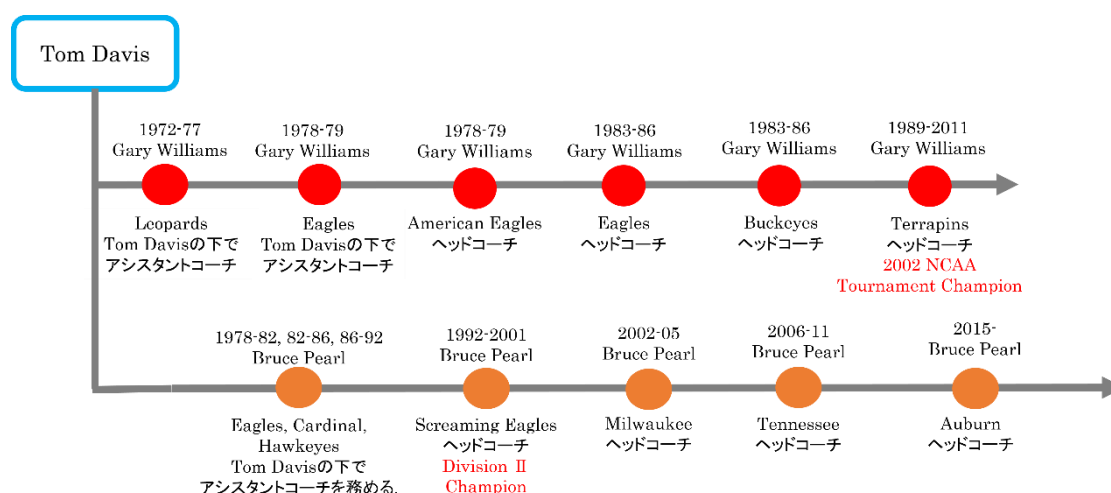


図10 アシスタントコーチ (Gary Williams, Bruce Pearl)

(3) Dan Fitzgerald, Dan Monson, Mark Few

Carroll Williamsは、アシスタントコーチ達にFlexを継承している²¹⁾。今回は、Gonzaga University Bulldogs（以下「Zags」と略す）に関係のあるコーチ達を中心に論じていく。なぜならば、Zagsでは、3人のコーチが何年にも渡ってこのオフェンスを採用してきたからである²¹⁾。ZagsにFlexを取り入れたDan Fitzgeraldは、Carroll Williamsのもとでアシスタントコーチとして働いていた²¹⁾。そして、現在NCAAで目覚ましい成績を残しているZagsのヘッドコーチMark Fewが成果を挙げている根底の部分。継承をした経緯、変化、普及が明らかになると考えたからである。そのため、今回はZagsのコーチ達に着目することとした。

Dan Fitzgeraldは、1971-72 Carroll Williamsのもとで1シーズン、Zagsで2シーズンアシスタントコーチを務め、1975-76シーズンから1977-78シーズンに改めてBroncosのCarroll Williamsのもとでアシスタントコーチを3シーズン経験した後に、1978年にZagsのヘッドコーチに就任した¹⁴⁾。Dan Fitzgeraldは、Carroll Williamsの下で教わったFlexをヘッドコーチに就任した際にZagsに取り入れ、それ以来Zagsの成功の要因となっている²⁹⁾。

Dan Fitzgeraldには、Dan Monson, Mark Fewという2人のアシスタントコーチが就いていた²⁴⁾。Mark Fewは、ZagsのDan Fitzgeraldの元でグラジュエイト・アシスタントコーチ²³⁾として1シーズン(1989-90)、アシスタントコーチとして7シーズン(1990-1997)を過ごした³¹⁾。1997シーズンからは、共にアシスタントコーチ

²³⁾ 前述したが、学生コーチ、卒業してすぐのコーチ、プレイヤーなどのメンタル面、スキル面などのコーチ。

をしていたDan Monsonが2シーズンヘッドコーチとなり¹⁵⁾、彼の元でも2シーズン、アシスタントコーチを務めた。Mark Fewは1999-2000シーズンにDan Monsonからヘッドコーチを引き継ぎ、Zagsで指揮を取った。Mark Fewは、Zagsのスタイルに合わせたプレイヤーの多才さを重視するFlexをチームに取り入れ²⁹⁾¹⁰³⁾、数々の功績を残している³¹⁾。この3人がZagsでFlexを採用してきたコーチであり、現在のZagsの成功要因一部となっている²⁹⁾。

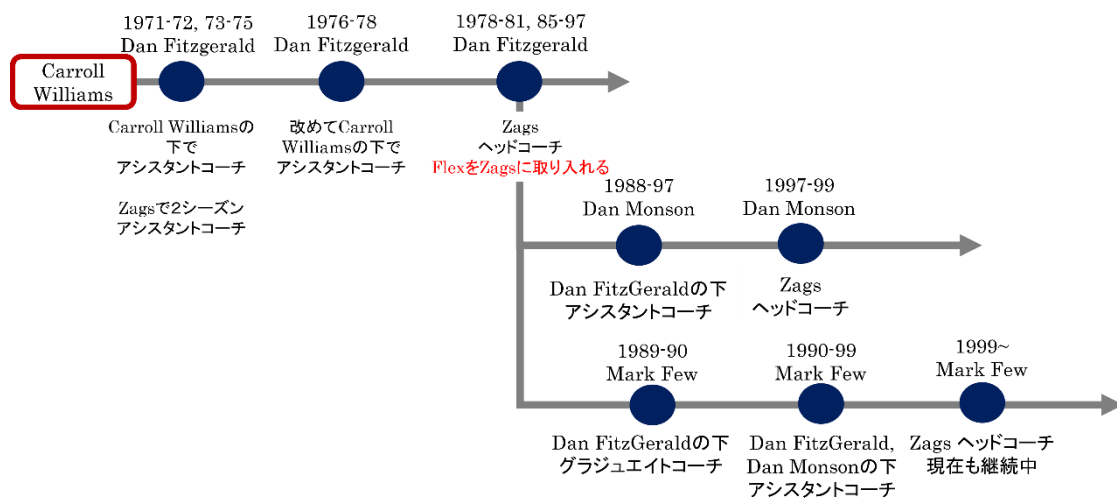


図 11 アシスタントコーチ (Zags)

各アシスタントコーチ達が、ヘッドコーチの指導理念（コーチングフィロソフィー）と戦術を継承しつつ自身の経験や、独自のフィロソフィーを構築することで、コーチ独自のFlexにオプションを付け加える。つまり戦術に変化が起きたわけである。ナイト・ニューエル(1992)らによれば、「自分自身の経験を通して学んできた物によって、プレイスタイルの基礎を形成することは理にかなっているようですが、それだけでは貧困の模倣となってしまいます。そこに自分独自の考え方やアイデアを付け加えることが、フィロソフィーを形成する上で欠かせないということを認識しなければなりません。」と述べており⁴⁴⁾、前述したような継承だけでなく、独自のフィロソフィーの構築は戦術に変化が加わる重要な要因であると考え。時代によってコーチ、プレイヤーは代わり、戦術も形を変えながら継承されていくことで戦術に変化が起き、普及につながると考える。そして、今後の日本独自の戦術への変化・普及にはこのような戦術、フィロソフィーを継承するシステムの構築も同時に必要であると考え。

2. 主要大会での活躍，ルールへの対応

2000年代初頭にFlexが再び脚光を浴びたこと，Flexがコーチ達によって見直されたことが変化・普及につながった要因ではないかと考える．

前述したように，コンティニューイティ・オフense(Flex)は，1984年に45秒ショットクロックが導入，93年に35秒に短縮されたことによって，年々オフenseの展開が困難になり，オフense戦術を実行する目的を失っていたと考えられる．Gary Williamsが率いるTerrapinsがFlexを使用して2002年のNCAAチャンピオン⁸⁵⁾になるまでFlexは時代遅れだと言われた戦術であった²¹⁾．2004アテネオリンピックにてアルゼンチン代表が，ゴールドメダルを奪取した⁴⁷⁾．NCAAとは違うルール形態を持つFIBAルールは，1999年にゲームのスピードアップをするために，ショットクロックが30秒から24秒にボールをフロントコートに運ぶ時間を10秒から8秒に変更した¹³³⁾．24秒ショットクロックルールの中で，チームのオフense戦術の主体がFlexであったこと．またそのFlexのスピード，リズムが今までとは異なる，ハイスピード（高速）であったことなど，NCAAにショットクロックが導入された当時は，時間の制約により，Flexの効果を十分に発揮することが難しくなったが，ショットクロックが24秒というルールにおいても，アプローチを変えることで，Flexの効果を十分に発揮できることが証明されたと考える．

高速Flexが当時の世界の潮流になるなど⁴⁷⁾，全世界が注目する試合でFlex主体のオフenseを展開．オフenseを展開するために障害の1つとなっていた，時間制約のルールに対応することで，Flexの新たな可能性を創造したこと，主要大会で成果を残したことで，時代遅れと言わ

れていた戦術が、脚光を浴びNBAでも使用されるほど²¹⁾、多くのコーチがFlexの見直しをしたことが変化・普及に多大な影響を与えていると考えられる。

3. “Steal” = “Study”

大学のコーチ達は、自分達のフィロソフィーや戦術戦略にオリジナルなものは殆どないと認めている²⁵⁾¹³⁶⁾。インターネットが普及する前は、コーチがクリニックに参加して有望なコーチの影響を受けることが多かった。インターネットが普及した現代においては、多くの情報がインターネット上で簡単に検索できる。そのため、戦術のアイデア「盗む」という行為が最も適切な行為である²¹⁾。昨年まで世界最高峰のプロバスケットボールリーグNBAのBoston Celticsでヘッドコーチを務めていた、Brad Stevensは自分の戦術についてESPN(2016)のインタビューで、「正直なところ、我々がこれまで行ってきたことはすべて他の誰かから盗んできました。」と述べ、オリジナルでないことを認めている²⁵⁾。彼もまた他チームのゲームをみて、気に入った戦術を見つけ、自分なりのオプションを追加している²⁵⁾。San Antonio SpursのGregg Popovichは、NBAから子ども達のバスケットまで、あらゆるレベルのコーチから戦術を「盗む」ことを認めている¹³⁶⁾。Gregg PopovichにとってBrad Stevensは、お気に入りのターゲットの一人だった¹³⁶⁾。NBAで活躍するコーチでさえも、各カテゴリーのゲーム映像を見て戦術を盗んで、自チームにあった要素や、自チームに合うように変化を加えチームに還元している。2004年アテネオリンピックでアルゼンチン代表をゴールドメダルに導いた、ルーベン・マグナノ(2013)は、「私達がやっているバージョンのフレックスは、ある特定

のコーチやチームから生じたものではなく、様々なコーチや、長い年月を通じて私が学んだ経験から生じたものである。そしてもちろん、未だに(いついかなるときも)私は、学び続けている。」¹⁰⁶⁾と述べている。

多くの有権者が本節で述べている「戦術を盗む」という行為は、私が解釈するに「戦術を学ぶ」という行為と捉える。前述した主要な大会で成果を残すことによって大会で使用された戦術がスポットライトを浴びることによって、最良な戦術が何かを学び続けるコーチがゲームを見る、クリニックに参加する等、そこで優秀なコーチから刺激や影響を受け、新たな知識を身に付けようとするコーチの向上心によって変化、普及していると考えられる。

第2節 考案から未だに使用される理由

Flexが考案されてから50年近く経っても使われ続ける理由。それは、5人全員が連動してバックスクリーンとダウンスクリーンを継続的に行う、スクリーンスクリーナーの要素が含まれている戦術であり⁵⁹⁾、ディフェンスはメンタル、フィジカルの両方に負荷がかかる戦術であるからだと考える。そこに、Flexにオプションとしてカウンターを加えると、よりディフェンスしづらい戦術であるからだと考える。本節で述べている「カウンター」とは、オフenseがディフェンスの動きを読む、もしくは、ディフェンスが次の動きを読んできたなら、オフenseがその逆を突く動きをすることをカウンターとする。相手の意図する力を利用して自らの力に置き換える。

Flexの基本的な狙いとして、ローポストエリアにいるプレイヤーがコーナーにいるプレイヤーにバックスクリーンをセット。そのスクリーンを使ってコーナーのプレイヤーがゴール下にカットする⁶⁰⁾。この動きはLay-upやゴール下を狙いゴールを脅かす。3Pシュートの確率が低いチームは多くあるが、Lay-upやゴール下ならば誰でも放てるはずである。倉石(2005)によると、「ゴール下で確率の高いシュートを打たれるということは、ディフェンスの崩壊を意味し、逆に考えれば相手のディフェンスを崩したことになる。」⁴⁶⁾と述べている。したがって、ディフェンスは必ずファーストカットをディフェンスする。そこに対応しなければ簡単にゴール下のシュートを決められてしまうからである。Flexは、バックスクリーン、ゴール下へのカット、ダウンスクリーンを継続的に行う戦術である。したがって、ゴールの近くで頻繁にカットが行われると、ディフェンスはそのカットを阻止しようとする。または、次の動きのパターンを読み先手をとる。そこでオフenseは、なにか異

なる動きや、パターンを入れることで、相手のすきを突くことができると考える。このようにFlexにはゴールを脅かす動きが多く取り入れられている。

具体的には、2004年のアテネオリンピックでゴールドメダルを獲得したアルゼンチン代表は、オーソドックスなFlexであったが、リズム、スピードが従来と違うFlexを使用していたのである⁴⁸⁾。

倉石(2005)は、アルゼンチン代表のFlexについて「今までの考え方は、スクリーンをセットすれば、そのスクリーンに対応するディフェンスの状況を読んでから動いていたのである。ところが、今回のアルゼンチンは、相手を読むのであるが、少しでも止まれば、ちゅうちょなく、スピードでかわしてしまえという形だ。」と述べている⁴⁸⁾。「何の変哲もないフレックスだが、アルゼンチン式はノーマルのスピードの2倍程度速い。」と同文献で報告されている(倉石, 2005)。したがって、Flexは誰もが知っている戦術であるため、オーソドックスな動きとは異なるリズム、スピード、パターン(もしくはカウンター)を組み込んで使用すると、相手は意表をつかれて対応することができなくなると考える。前述したように、コーチ達の経験、学び、努力が独自のオプションを創り出す糧となり、または創り出せることから、Flexが今でも使われ続けている要因ではないかと考える。そして、アルゼンチン代表のFlexは、同じアライメント(隊形)でありながら、そして図式化したら考案時とあまり変化してないにも関わらず、動き方のスピード、リズムが異なる。つまり形だけではなく今まで考えもしなかったスピードの変化に着目したことで、オリジナリティがでた。その成果が高確率なオフENSEを生んだ。そのことが現在にも十分使えるオフENSE戦術となったと言えるのではないか。今では、Flexの簡易版である、連続性のない動きの「スライス

カット」⁶⁴⁾や、Flexの基本的な動きである、ローポストエリアにいるプレイヤーがコーナーにいるプレイヤーにバックスクリーンをセット、そのスクリーンを使ってゴール下にカットする動きだけを他の戦術やアレンジメントから展開していることが窺われる⁷⁸⁾。

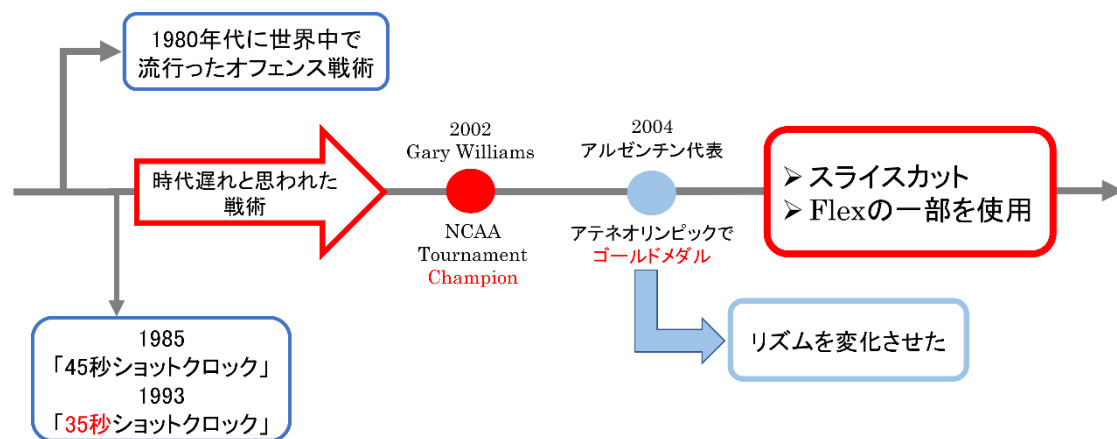


図12 Flex変化・普及

IV. 結論

本研究は、バスケットボール競技における、オフェンス戦術の考案、変革、変化・普及を整理し考察を交えながら論じた。

第1章では、オフェンス戦術の考案者について論じた。本研究で着目したオフェンス戦術は、Pete Newellが考案したReverse Actionから考案したオフェンスであり、東海岸でコーチをしたTom Davisと、西海岸でコーチをしていたCarroll Williamsが独自に考案した戦術であったと推察する。同時期に、西と東の両サイドで現在のような情報が発達していない頃に、同様のオフェンス戦術を考案するのは極めて稀なことであったと考える。

Tom Davisが、TerrapinsでGarry Williamsと考案したオフェンス戦術がFlexの原型となるRegularである。Regularとは、Bud Millikanがカレッジパークに導入したPete NewellのReverse Actionと、Tom DavisがWisconsin-Platteville校でプレイヤーとして学んだマンツーマンオフェンスを組み合わせたものであった。

Terrapinsでグラジュエイトコーチに就く前にPortage High Schoolでコーチをしていた。そこで彼はプレータイムシェアにジレンマを感じていた。多くのプレイヤーにチャンスを与えたかった。このようなTom Davisの考え方から大学で、その方策として、ベースラインから激しいディフェンスで相手にプレッシャーをかけ、ミスを誘発させる。ディフェンスを突破されるとイージーなシュートを許すこともあるが、ゲームのテンポアップを見込めるフルコートディフェンスをベースに、オフェンスでは、誰でもどんなポジションにも入ることができる、Flex(Regular)を考案してゲームで使用した。Tom Davis独自のアップテンポなバスケットボールフィロソフィーを生みだしていた。

Carroll Williams がヘッドコーチをしていた当時は、Lew Alcindorのような7フッター級ビックマンがゲームに欠かせない存在であった。そのような世界の中で、Broncosは新加入プレイヤーが7人、最高身長が6フィート10インチと若くて小柄なチームであった。当時のNCAAルールは、シュートを制限する(時間制約)ルールがなく、シュートチャンスに至っても、シュートすることなく、オフェンス時間を費やして相手を心身共にプレッシャーを与える。その結果、イライラさせる。フレストレーションを溜めさせるディレイ戦術や、リードしたチームが、ストーリング。つまり、ボール保持をする。時間を使い、プレー時間を自らのオフェンスで費やす戦術。ボールを保持して勝ち逃げすることを目的としたストールオフェンス戦術が使われていた。Lay-inを放つまでスクリーンとカッティングを繰り返し行い、自らのオフェンスで時間を費やし、相手にオフェンス時間を与えないことを目的として、強力なインサイドを有するチームや、身体的、運動的に勝っているチームに勝つために、Carroll Williamsは、Rigidを考案したと考える。彼はプレイヤー達に構造的なことを望んでいた。Rigidは、シュート成功率の高いLay-inを放つまで連続して行われるオフェンスであり、オフェンスの動き方、プレーの仕方(戦術)、考え方、目的がチーム全員に浸透させる徹底されたオフェンス戦術だったと推察される。Rigidは、シュートチャンスを創るための戦術があり、プレイヤーは正確にプレーしようとするため、場面によってはシュートチャンスを逃すことや、状況判断が難しい場面がある、同じプレーが連続して行われるため、ディフェンスは次のプレーが読み易くなる。そこで、Carroll Williamsは、プレイヤー達のRigidに対する戦術理解度が上がったシーズンの後半にRigidに柔軟性を持たせた。このことからRigidからFlexと呼ばれる

ようになった． RigidのオプションがFlexと推察される． Flexになると， シュートの制約がなくなったため， どこからでもシュートを放つようになり， より良いシュートセレクトができたと考えられる． ゴール下を守っていたビックマンはシュートを打たせないためにゴール下から移動し， ペリメーターまでマッチアップする必要が生じたと考える． ここで現代にも使用されるFlexとその考え方が考案されたと考える．

第2章では， Flexの変革について論じている． Flexはルール変遷， テクノロジーの発展， 人的要因（構成メンバー， ペリメータープレイヤーの台頭）の3つの要因によって変革しなければならなかったと考える．

ルール変遷について， 45秒ショットクロックが導入されたことでチームがボールをコントロールできる時間を制限されたことが大きく関係している． Flexは， シュートチャンスができるまで， デザインされたプレーを連続して展開するコンティニュイティ・オフenseであったため， 時間を消費するディレイ戦術や， ストールオフense戦術の要素を入れたコンティニュイティ・オフenseの展開が困難になり， Flexが次第にその効力を失ってしまったのではないかと考える．

2つめの要因として， テクノロジーの発展も影響していると考ええる． 1980年代頃にテクノロジーの発展により， 映像技術や， 情報伝達技術が発達したことで， スカウティング力が向上した． 対戦相手のオフenseを分析できることにより， ディフェンス力が向上したのではないかと考える． したがってFlexに限らず， パターン・オフenseやコンティニュイティ・オフenseの展開が難しくなったと考える．

3つ目の要因として， 人的要因（メンバー構成， ペリメータープレイヤーの台頭）が関係していると考えられる． Tom Davisが， コーチを

した大学ではFlexに新たな要素を付け加えていた。したがって、チームの特徴と個人の特徴を活かしながら、理想を追求してFlexの変革を行ったと考える。1980年代に入ると、Larry BirdやErvin “Magic” Johnsonといったペリメータープレイヤーが、ポジションやサイズに関わらず、オールラウンドなプレーを披露して活躍をした。インサイドでのパワープレイのスタイルから、スピーディーで華麗なゲーム様相に少しずつ変化した。このことから、バスケットボール界でペリメータープレイヤーの存在感も上がったと考える。なおかつLarry BirdやErvin “Magic” Johnsonに憧れて、彼らのようになりたいと望むプレイヤーが増えオールラウンドにできるプレイヤーが増えたため、いずれのプレイヤーもどのポジションでも入ることができるFlexは多くの大学に使用され大学ごとの変化と普及を促したのではないかと考える。指導しているチーム環境の中で台頭してくるプレイヤーやチームの特徴を的確に捉え、チームに合った戦術に変革させることが必要である。

第3章では、変革をしたFlexがどのように変化・普及をしたのか、考案から50年経過しても使われ続けている理由を述べている。

Flexを変化・普及させたのは、Tom Davis, Carroll Williamsのアシスタントコーチであると考える。

Garry Williamsは、Tom Davisの元を離れてからは、American Eaglesで初めてヘッドコーチに努め、彼も行く先々でFlexを使用していた。そしてTerrapinsでは、NCAAチャンピオンにも輝いている。Gary Williamsは、Tom Davisのようにテンポの速いプレーにFlexを取り入れており、指導理念を継承しながらGary Williams独自のフィロソフィーを構築していることが伺えた。

Bruce Pearlは、Tom Davisの元でFlexとプレッシャーディフェンスを学び、Tom Davisのコーチングフィロソフィーに影響を受けている。Tom Davisの元を離れた後は、Division IIの大学でヘッドコーチを務め、Tom Davisから教わったFlexを使ってチャンピオンになった。そして、現代のルールやスタイルに合わせた”Cutters”（Flexのオプション）というシステムを考案している。

Carroll Williamsは、2人のアシスタントコーチにFlexを継承している。本研究では、Zagsのコーチに着目した。Zagsでは、3人のコーチ達が20年ほどに渡りこのオフENSESを採用している。そのため、より発展の経緯が見えると考えたからである。

Dan Fitzgeraldは、Carroll Williamsの元で4シーズンアシスタントコーチを経験、その後Zagsのヘッドコーチに就任した。Carroll Williamsの元で学んだFlexをZagsでも取り入れた。Dan Fitzgeraldには、Dan Manson、Mark Fewという2人のアシスタントコーチが就いていた。Dan MonsonがDan Fitzgeraldの後任としてZagsのヘッドコーチを引き継いだ。Mark Fewは、Dan Fitzgeraldの元でグラジュエイト・アシスタントコーチとして1シーズン、アシスタントコーチとして7シーズン、Dan Monsonの元で2シーズンアシスタントコーチを務めた。その後Zagsのヘッドコーチに就任した。そして、Mark Fewは、Zagsのスタイルに合わせたFlexを導入している。この3人がZagsでFlexを採用してきたコーチであり、現在のZagsの成功の一部となっている。

各大学のコーチ達が、名将達の影響を受け指導理念を継承した。経験から独自のフィロソフィーを創りFlexのオプションを増やして次のアシスタントコーチに継承する。継承と独自のフィロソフィーの構築は、

戦術に変化が加わる重要な要因であり、継承することは普及の1つの要因であると考える。

そして、Flexが再び脚光を浴び、コーチ達に見直されたことによって、次の変化・普及につながった要因ではないかと考える。

Garry Williams 率いる Terrapins が Flex を用いて NCAA Tournament で優勝したことや、NCAA とはルールが違う、FIBA ルールにもかかわらず 2004 年 アテネ オリンピック で優勝した アルゼンチン 代表が高速 Flex を用いて優勝したことで、Flex が再び注目され、あらゆるコーチに見直されたのではないかと考える。大学のコーチや NBA のコーチ達は、他大学の戦術や、コーチを参考にして、自分なりのオプションを加えている。したがって、主要な大会で勝つことで、古く使わなくなってしまった戦術でさえもスポットライトを浴びたことがきっかけになり、クリニックやゲーム映像が発信され、学び続けるコーチの向上心とオプションの追加によって変化・普及につながると考える。

第2節では Flex が考案されてから 50 年経過するが、未だに戦術として使われ続けている理由を述べている。Flex の基本的な狙いとして、ローポストエリアにいるプレイヤーがコーナーにいるプレイヤーにバックスクリーンをセット。そのスクリーンを使ってコーナーのプレイヤーがゴール下にカットする。この動きは Lay-up やゴール下を狙いゴールを脅かす。5人でスクリーンスクリナーを駆使しながら継続性のあるオフENSEを展開してシュートを狙い、ディフェンスのメンタル、フィジカルに負荷をかけることができる戦術である。動きの中にカウンターを加える事により、相手は不意を突かれ、よりディフェンスしづらくなる戦術になるからだと考える。

アルゼンチン代表は、考案時とあまり変化してないアライメント(隊形)、相手の動きを読んでから動く考え方にも関わらず、従来のFlexよりも2倍程度速いスピードで動くため、通常のFlexよりもリズムが異なる。つまり形だけではなく今まで考えもしなかったスピードの変化に着目したことで、オリジナリティがでた。その成果が高確率なオフENSEを生んだ。コーチが独自のオプションを創り出し、創り出せることによって、現在にも十分使えるオフENSE戦術となったと言えるのではないかと示唆される。現在ではFlexの簡易版である「スライスカット」や、Flexの一部がオフENSE戦術として使用されていることが窺われた。

これらの結果、考察からFlexが考案されてから普及に至るまでの経緯、戦術を考案するための基礎を明らかにし新たな知見を得ることができた。コーチ独自のフィロソフィーを形成することが戦術の考案、そして戦術に変化を起こす土台となる。また、バスケットボール競技においてルール変遷が戦術の変革に大きく関係している。バスケットボール競技が考案されてから現在に至るまで、観客を魅了するために、よりゲームを面白くするためにルールが改正されてきた。バスケットボール競技は今後もルール変遷が続けられるであろうことから、戦術の変革が必要になる。したがって、今後の日本独自の戦術の考案、変革、普及、戦術研究の一助となれば幸いである。

V. 研究の限界

研究の限界として現在COVID-19の影響で、行動制限や自由にコミュニケーションすら取れない状況であった。そのため、現地のコーチにインタビュー調査や、地域のバスケットボール文化といった肌で感じるものも調査することができない状況であった。したがって、日本で集めることが可能である史料になり、Tom Davisの”Regular”のアライメントや、Carroll Williamsの”Rigid”のアライメントの史料といったより深い史料等を集めることが困難であった。故に現地のコーチへのインタビューと地域のバスケットボール文化といった現地でしか感じることができない調査、史料と文献の調査及び、“Regular”と”Rigid”のダイアグラム作成をすることでより、Flexに対する知見を深めることを今後の課題としたい。

VI. 参考文献

- 1) Aaron Rose (2021) New Raptors Assistant Trevor Gleeson Explains His Flex Offensive Philosophies.
<https://www.si.com/nba/raptors/news/toronto-raptors-trevor-gleeson-explains-flex-offense> (参照日2022年1月4日)
- 2) 赤瀬川史郎監修(2018) パーソナル英和・和英辞典[第3版]. 株式会社学研プラス p266.
- 3) 赤瀬川史郎監修(2018) パーソナル英和・和英辞典[第3版]. 株式会社学研プラス p609.
- 4) Alex Byington (2019) AUBURN BASKETBALL Q&A: Bruce Pearl talks staff, show-cause, coaching philosophy and much more.
https://oanow.com/sports/college/auburn/auburn-basketball-q-a-bruce-pearl-talks-staff-show-cause-coaching-philosophy-and-much-more/article_ef8c50ec-b632-11e3-9635-001a4bcf6878.html (参照日2021年11月8日)
- 5) Andy Wittry (2020) Bill Russell: College basketball stats, best moments, quotes. NCAA.COM
<https://www.ncaa.com/news/basketball-men/article/2020-05-12/bill-russell-college-basketball-stats-best-moments-quotes> (参照日2021年10月8日)
- 6) Andy Wittry (2020) Kareem Abdul-Jabber: College stats, best moments, quotes. NCAA.COM.

- <https://www.ncaa.com/news/basketball-men/article/2020-05-04/kareem-abdul-jabbar-college-stats-best-moments-quotes> (参照日2021年10月5日)
- 7) Andy Wittry (2020) Larry Bird: College basketball stats, best moments, quotes. NCAA.COM
<https://www.ncaa.com/news/basketball-men/article/2020-04-24/larry-bird-college-basketball-stats-best-moments-quotes> (参照日2021年10月18日)
- 8) Andy Wittry (2021) Magic Johnson: College basketball stats, best moments, quotes. NCAA.COM
<https://www.ncaa.com/news/basketball-men/article/2021-02-17/earvin-magic-johnson-college-basketball-stats-best-moments-quotes> (参照日2021年10月18日)
- 9) Andy Wittry (2020) UCLA men's college basketball championships: Complete history. NCAA.com.
<https://www.ncaa.com/basketball-men/d1/ucla-mens-college-basketball-championships-complete-history> (参照日2021年10月5日)
- 10) Auburn University Athletics (online) Men's Basketball. Bruce Pearl.
<https://auburntigers.com/staff-directory/bruce-pearl/1407> (参照日2021年11月3日)
- 11) BASKETBALL HALL OF FAME (Online)
<https://www.hoophall.com/hall-of-famers/pete-newell/>

(参照日2021年11月1日)

- 12) BRONCO BENCH FOUNDATION SANTA CLARA
UNIVERSITY ATHLETICS (online)
<https://www.scu.edu/athletics/bruncobench/hall-of-fame/hall-of-fame-inductees/williams-carroll/> (参照日
2021年6月28日)
- 13) Coaches Database (online) College Basketball
Coach Info and News. Bruce Pearl.
<https://www.coachesdatabase.com/bruce-pearl/> (参照日
2021年11月3日)
- 14) Coaches Database (online) College Basketball
Coach Info and News. Dan Fitzgerald.
<https://www.coachesdatabase.com/dan-fitzgerald/> (参
照日2021年11月5日)
- 15) Coach Database (online) College Basketball Coach
Info and News. Dan Monson.
<https://www.coachesdatabase.com/dan-monson/> (参照
日11月7日)
- 16) Coaches Database. (online) College Basketball
Coach Info and News. Tom Davis.
<https://www.coachesdatabase.com/tom-davis/> (参照日
2021年10月8日)
- 17) Creighton Basketball(online) 1975-
76(M)Basketball Roster Creighton University.
<https://gocreighton.com/sports/mens->

- basketball/roster/1975-76 (参照日2021年10月7日)
- 18) Creighton Basketball(online) 1975-76(M)Basketball Schedule. Creighton University.
<https://gocreighton.com/sports/mens-basketball/schedule/1975-76> (参照日2021年10月7日)
- 19) Davide Breschi (2021) Guida alla Flex Offense. #BASKETBALL MINDS.
<http://www.basketballminds.it/guida-alla-Flex-Offense/199> (参照日2022年1月20日)
- 20) ディーン・スミス：山本雅之訳(1992)BASKETBALL MULTIPLE OFFENSE AND DEFFENSE. 日本文化出版.
P41-42
- 21) Don Markus (2003) Terps' muscle puts 'flex' back in style. The Baltimore Sun.
<https://www.baltimoresun.com/news/bs-xpm-2003-03-20-0303200092-story.html> (参照日2021年5月21日)
- 22) Doug Merlino (2011) Magic Johnson and Larry Bird: The Rivalry That Transformed the NBA.
<https://bleacherreport.com/articles/699088-magic-johnson-and-larry-bird-therivalry-that-transformed-the-nba> (参照日2022年1月20日)
- 23) Encyclopedia Britannica. Basketball. U.S. professional basketball. Britannica.com.
<https://www.britannica.com/sports/basketball/U-S-professional-basketball> (参照日2021年10月24日)

- 24) ESPN.com(online) Fitzgerald dies; built Zags' foundation. <https://www.espn.com/mens-college-basketball/news/story?id=4841748> (参照日2021年12月15日)
- 25) ESPN Staff Chris Forsberg (2016) The scheme dreamer: How Brad Stevens draws up winning plays. ESPN.com (参照日2021年11月17日)
- 26) FIBA(online)INTERNATIONAL BASKETBALL MIGRATION REPORT 2020
<https://www.fiba.basketball/documents/ibmr2020.pdf>
(参照日2021年12月10日)
- 27) Finance (2010) A Conversation with Gary Williams, Mens Basketball Coach, University of Maryland. EVERGREEN ADVISORS BLOG.
<https://evergreenadvisorsllc.com/a-conversation-with-gary-williams-mens-basketball-coach-university-of-maryland/> (参照日2021年10月8日)
- 28) Former Bronco Coach and AD Selected to Hall of Fame (2001) OFFICIAL WEBSITE OF THE SANTA CLARA BRONCOS. BRONCOS ATHLETICS.
<https://www.santaclarabroncos.com/general/2001-02/releases/080901aaa.html> (参照日2021年10月5日)
- 29) Fran Fraschilla (online) Flexing a team's offense. Men's College Basketball Hoops101. ESPN.com.
<http://static.espn.go.com/ncb/2003/0218/1510637.html>

(参照日2021年10月10日)

- 30) Glenn Wilkes (2012) THE COMPLETE BOOK OF BASKETBALL'S FLEX OFFENSE.
- 31) Gonzaga University (online) Men's Basketball Coach Mark Few. <https://gozags.com/sports/men-basketball/roster/coaches/mark-few/494> (参照日2021年11月7日)
- 32) G.シュティラー, I.コンツァック, H.デブラー著; 唐木國彦監修(1993)ボールゲーム指導辞典. 東京大修館. P22.
- 33) G.シュティラー, I.コンツァック, H.デブラー著; 唐木國彦監修(1993)ボールゲーム指導辞典. 東京大修館. P147
- 34) Hall of Fame(online)BRONCO BENCH FOUNDATION SANTA CLARA UNIVERSITY ATHLETICS
<https://www.scu.edu/athletics/bruncobench/hall-of-fame/> (参照日2021年10月5日)
- 35) Harkins, Harry L (1983) The Flex-continuity basketball offense. West Nyack, N.Y.: Parker Pub. Co.
- 36) ハリー・L. ハーキンス, ジェリー・クラウス: 二杉茂, 山下新樹, 伊藤淳(2018)賢者の戦術 すべてのバスケットボールコーチのために. 晃洋書房.
- 37) Indiana State Hall of Fame (online)
<https://gosycamores.com/honors/hall-of-fame/larry-bird/> (参照日2021年10月18日)

- 38) Indiana University (online) 1975-76 Men's Basketball Roster. Men's Basketball.
<https://iuhoosiers.com/sports/mens-basketball/roster/1975-76> (参照日2021年10月7日)
- 39) 稲垣安二・荒木郁夫・北川勇喜・上平雅史・武井光彦・進藤満志夫(1985)球技における戦法の基本概念に関する一試論.
- 40) 稲垣安二(1989)球技の戦術体系序説. 梓出版者.
- 41) ヤーン・ケルン: 朝岡ほか訳(1989)スポーツ戦術入門. 大修館書店. P21.
- 42) Jeff Barker (2010) Former Terps basketball coach Millikan 'was a fine teacher'. The BALTIMORE SUN.
<https://www.baltimoresun.com/sports/terps/bs-xpm-2010-01-28-bal-millikan0128-story.html> (参照日2021年10月31日)
- 43) Johnny Smith (2018, online) Reign of Lew Alcindor in the age of revolt. THE UNDEFEATED. Athlete Activism.
<https://theundefeated.com/features/lew-alcindor-kareem-abdul-jabbar-ucla-boycot-1968-olympics/> (参照日2021年10月27日)
- 44) ナイト: 笠原成元訳 (1992) ウィニングバスケットボール. 大修館書店.
- 45) 倉石平(2005)バスケットボールのコーチを始めるために. 日本文化出版. P29
- 46) 倉石平(2005)バスケットボールのコーチを始めるために. 日本

文化出版．P85

- 47) 倉石平(2005) 男子バスケットボール競技 アテネオリンピック
の報告．スポーツ科学研究，2,29-50 P 32-33
- 48) 倉石平(2005) 男子バスケットボール競技 アテネオリンピック
報告．スポーツ科学研究，2,29-50 P33
- 49) 倉石平(2005) 男子バスケットボール競技 アテネオリンピック
の報告．スポーツ科学研究，2,29-50 p38
- 50) 倉石平(2008)「北京オリンピック メダル獲得へのキーポイント」月刊バスケットボール11月号付録 p11
- 51) 倉石平(2010)HOOPバスケットボールコーチング救急マニュアル [倉石平の21世紀はNBAから学ぼう!]．日本文化出版株式会社．
P6
- 52) 倉石平 (2014) アメリカにおけるバスケットボールの競技事情．
町田光ほか著，グローバル・スポーツの課題と展望．早稲田スポーツ
ナレッジ研究会編．(有)創文企画．P47
- 53) 倉石平 (2014) アメリカにおけるバスケットボールの競技事情．
町田光ほか著，グローバル・スポーツの課題と展望．早稲田スポーツ
ナレッジ研究会編．(有)創文企画．P48
- 54) 倉石平 (2014) アメリカにおけるバスケットボールの競技事情．
町田光ほか著，グローバル・スポーツの課題と展望．早稲田スポーツ
ナレッジ研究会編．(有)創文企画．P49
- 55) 倉石平(2014)アメリカにおけるバスケットボールの競技事情．
町田光ほか著，グローバル・スポーツの課題と展望．早稲田スポーツ
ナレッジ研究会編．(有)創文企画．P50
- 56) 倉石平(2014)アメリカにおけるバスケットボールの競技事情．

- 町田光ほか著，グローバル・スポーツの課題と展望．早稲田スポーツナレッジ研究会編．(有)創文企画．P51
- 57) 倉石平(2014)アメリカにおけるバスケットボールの競技事情．町田光ほか著，グローバル・スポーツの課題と展望．早稲田スポーツナレッジ研究会編．(有)創文企画．P52-53
- 58) 倉石平(2015)月刊バスケットボール「SKILL BOOK」シリーズ～「攻めろ」「守れ」「走れ」では解消できない指導者の悩みを論理的に解消!～バスケットボールを”極”める．日本文化出版株式会社．P.84
- 59) 倉石平(2015)月刊バスケットボール「SKILL BOOK」シリーズ～「攻めろ」「守れ」「走れ」では解消できない指導者の悩みを論理的に解消!～バスケットボールを”極”める．日本文化出版株式会社．P.96
- 60) 倉石平(2015)月刊バスケットボール「SKILL BOOK」シリーズ～「攻めろ」「守れ」「走れ」では解消できない指導者の悩みを論理的に解消!～バスケットボールを”極”める．日本文化出版株式会社．P.129
- 61) 倉石平(2021)バスケットボールまんが用語辞典．月刊バスケットボール5月号臨時増刊．日本文化出版 P.16
- 62) 倉石平(2021)バスケットボールまんが用語辞典．月刊バスケットボール5月号臨時増刊．日本文化出版 P.87
- 63) 倉石平(2021)バスケットボールまんが用語辞典．月刊バスケットボール5月号臨時増刊．日本文化出版 P.92
- 64) 倉石平(2021)バスケットボールまんが用語辞典．月刊バスケットボール5月号臨時増刊．日本文化出版 P.130

- 65) 倉石平(2021)バスケットボールまんが用語辞典．月刊バスケットボール5月号臨時増刊．日本文化出版 P.161
- 66) 倉石平(2021)バスケットボールの潮流に見るコンタクトプレーの重要性～倉石平が解説．Yahooニュース．
<https://news.yahoo.co.jp/articles/22849e7b285a65372a4249acd001f223f2b44e6e> (参照日2021年12月25日)
- 67) 公益財団法人日本バスケットボール協会(2021)2021バスケットボール競技規則・公式解説．P7
- 68) 小谷究(2015)日本のバスケットボール競技におけるオフボールスクリーンの採用過程に関する研究．運動とスポーツの科学．第21巻 第1号．
- 69) Lafayette College Athletics(online) Maroon Club
1971-72 Men's Basketball Team.
https://goleopards.com/sports/2018/9/17/_maroonclub_mtt_1971_72_mens_basketball_team_879130_html.aspx (参照日2021年10月4日)
- 70) Lafayette College Athletics(online) Maroon club
mtt davis tom00 html
https://goleopards.com/sports/2018/9/17/_maroonclub_mtt_davis_tom00_html.aspx (参照日2021年10月4日)
- 71) Matthew Harris (2018) After early turmoil,
Auburn is flexing its muscles.
<https://www.rockmnation.com/2018/1/23/16919664/auburn-missouri-basketball-preview> (参照日2021年10月12日)

- 72) Matthew Stevens (2017) Pearl says rules dictate he can't press full-time anymore. Montgomery Advertiser.
<https://www.montgomeryadvertiser.com/story/sports/college/auburnauthority/2017/03/06/pearl-says-rules-dictate-he-cant-press-full-time-anymore/98817194/>
(参照日2021年10月8日)
- 73) 松本真(2007)スポーツ戦術の基礎研究 構造論的視点から. 埼玉大学紀要 教育学部, 56(1): 225~231 p225
- 74) Marc D'Amico. (online) Bill Russell Biography. Celtics.com.
<https://www.nba.com/celtics/history/legends/bill-russell> (参照日2021年10月7日)
- 75) MasterClass staff (2021) Flex Offense Explained: How the Flex Offense Works in Basketball.
<https://www.masterclass.com/articles/flex-offense-explained> (参照日2022年1月23日)
- 76) Memphis Athletics. (online) 1957-76 Men's Basketball Schedule.
<https://gotigersgo.com/sports/mens-basketball/schedule/1975-76> (参照日2021年10月7日)
- 77) Memphis Athletics. (online) 1975-76 Men's Basketball Roster. The University of Memphis.
<https://gotigersgo.com/sports/mens-basketball/roster/1975-76> (参照日2021年10月7日)

- 78) Michael Pina (2021) Golden State's Bounce Back on Offense Is This Season's Most Important Surprise. Sports Illustrated.
<https://www.si.com/nba/2021/11/17/warriors-offense-bounce-back-stephen-curry> (参照日2022年1月4日)
- 79) Michigan State. (online) The Official Website of Spartan Athletics.
<https://msuspartans.com/honors/hall-of-fame/earvin-magic-johnson/138> (参照日2021年10月18日)
- 80) Mike Lopresti (2021) Why Magic vs. Bird forever changed college basketball. NCAA.COM
<https://www.ncaa.com/news/basketball-men/article/2020-03-25/why-magic-vs-bird-forever-changed-college-basketball> (参照日2021年10月18日)
- 81) Naismith, J, 水谷豊訳(1980)バスケットボール：その起源と発展. 日本YMCA同盟出版部, p159
- 82) NBA Advanced Stats. (online) All Time Leaders.
<https://www.nba.com/stats/alltime-leaders/> (参照日2021年10月5日)
- 83) NBA.com Staff (2021) Legends profile: Bill Russell. NBA.com NBA HISTORY.
<https://www.nba.com/news/history-nba-legend-bill-russell> (参照日2021年10月7日)
- 84) NBA.com Staff (2021) Legends profile: Wilt Chamberlain. NBA.com NBA HISTORY.

<https://www.nba.com/news/history-nba-legend-wilt-chamberlain> (参照日2021年10月5日)

- 85) NCAA.COM (online) Division I Man's Basketball Championship History.

<https://www.ncaa.com/history/basketball-men/d1> (参照日2021年10月14日)

- 86) 日本コーチング学会(2017)コーチング学への招待. 大修館書店.
P127

- 87) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-. 關西大學「文學論集」, 40(4), p94

- 88) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-. 關西大學「文學論集」, 40(4), p109

- 89) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-. 關西大學「文學論集」, 40(4), p111

- 90) 笈田欣治, 水谷豊, 藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-. 關西大學「文學論集」, 40(4), p123

- 91) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-. 關西大學「文學論集」, 40(4), p124

- 92) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-. 關

- 西大學「文學論集」，40(4)，p138
- 93) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-。關西大學「文學論集」，40(4)，p142
- 94) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-。關西大學「文學論集」，40(4)，p144
- 95) 笈田欣治・水谷豊・藤木大三(1991)アメリカ・バスケットボールの技術発達史-近代バスケットボールを築いたコーチの系譜-。關西大學「文學論集」，40(4)，p79-159
- 96) OFFICIAL WEBSITE OF THE SANTA CLARA BRONCOS. (online) Flex Offense Gaining Converts. Men's Basketball
<https://www.santaclarabroncos.com/sports/men-basketball/2002-03/releases/032103aaa.html> (参照日2021年5月20日)
- 97) 大井成義(2021)チェンバレン，バード，ウエスト...カレッジ史上最強プレーヤートップ15を発表! [Part.2] <DUNKSHOOT>. THE DIGEST.
https://thedigestweb.com/basketball/detail_2/id=38650 (参照日2021年10月5日)
- 98) 大井成義(2021)ラッセル，マラビッチ，ロバートソン...カレッジ史上最強プレーヤートップ15発表! [Part.3] <DUNKSHOOT>. THE DIGEST.
<https://thedigestweb.com/basketball/detail/id=38781?>

open=on (参照日2021年10月5日)

99) 大澤正道(2008)面白いほどよくわかるクラウゼヴィッツの戦争論 難局に勝利する戦略発想と指導者の条件. 日本文芸社, p226.

100) 大澤正道(2008)面白いほどよくわかるクラウゼヴィッツの戦争論 難局に勝利する戦略発想と指導者の条件. 日本文芸社, p227.

101) 大島和人(2019)八村塁のNBAドラフト9位指名は何が凄い?

これだけは知って起きたい3つのポイント. 文春オンライン.

<https://bunshun.jp/articles/-/12499> (参照日2021年11月30日)

102) Oliver Neven (2021) Raptors assistant Glesson brings flex and winning pedigree to coaching staff.

Yahoo! Sports.

<https://ca.sports.yahoo.com/news/raptors-assistant-gleeson-brings-flex-and-winning-pedigree-to-coaching-staff-210200111.html> (参照日2022年1月23日)

103) Reid Forgrave (2019) 2019 NCAA Tournament:

Gonzaga's offense vs. Texas Tech's defense gives us a can't miss March Madness matchup. CBS NCAA BB

<https://www.cbssports.com/college-basketball/news/2019-ncaa-tournament-gonzagas-offense-vs-texas-techs-defense-gives-us-a-cant-miss-march-madness-matchup/> (参照日2021年1月4日)

104) Rick Brown (2021) Dr. Tom Davis Discusses Roy Marble, Luka Garza. HAWKEYE NATION.com

<https://www.hawkeyenation.com/news/basketball/dr->

- tom-davis-discusses-roy-marble-luka-garza/article34473176-72d7-11ed-aa04-f39742efcd18.html (参照日2022年1月15日)
- 105) Roberto Carmenati (2009) THE EVOLUTION OF OFFENSE IN EUROPEAN BASKETBALL. FIBA ASSIST MAGAZINE 41
p24.<http://old.slovakbasket.sk/ZT/files/41%20fiba%20ml.pdf> (参照日2021年12月25日)
- 106) ルーベン・マグナノ(2013) フレックスオフェンス. ジョルジオ・ガンドルフィ編:陸川章監修・佐良土茂樹訳. NBA COACHES PLAY BOOK. (株)スタジオ タック クリエイティブ. P142-153
- 107) ルーベン・マグナノ(2013) フレックスオフェンス. ジョルジオ・ガンドルフィ編:陸川章監修, 佐良土茂樹訳, NBA COACHES PLAYBOOK. (株)スタジオ タック クリエイティブ. P145
- 108) SAN JOSE SPORTS HALL OF FAME CLASS OF 2001. (online) SAN JOSE SPORTS AUTHORITY.
<https://sjsa.org/carroll-williams/> (参照日2021年10月31日)
- 109) SCM Staff (2016) A Bronco Legend's Dream Team. Santa Clara Magazine.
<https://magazine.scu.edu/magazines/spring/a-bronco-legends-dream-team/> (参照日2021年10月30日)
- 110) Sean Deveney (2015) Celtics' Brad Stevens: From 'clueless' to NBA coaching elite. SPORTING NEWS.

<https://www.sportingnews.com/us/nba/news/nba-playoffs-boston-celtics-coach-brad-stevens-offensive-system-defensive-rajon-rondo-cleveland-cavaliers/1sq0anrvjsroa168hs36jtzwzc>（参照日2021年1月4日）

- 111) Sergey Tkachenko (2019) Perth Wildcats - Developing a Series Around Flex Action. FAST MODEL SPORTS.

<https://team.fastmodelsports.com/2019/02/25/perth-wildcats-flex-series/>（参照日2022年1月4日）

- 112) 嶋田出雲(1992)バスケットボール勝利への戦略・戦術. 大修館書店. 1992/2/21

- 113) 嶋田出雲(1992)バスケットボール勝利への戦略・戦術. 大修館書店. 1992/2/21. P1.

- 114) Sports Reference LLC. Basketball College. (online) 1971-72 Lafayette Leopards Schedule and Results.

<https://www.sports-reference.com/cbb/schools/lafayette/1972-schedule.html>（参照日2021年10月4日）

- 115) Sports Reference LLC. Basketball College. (online) 1974-75 Santa Clara Broncos Roster and Stats.

<https://www.sports-reference.com/cbb/schools/santa-clara/1975.html>（参照日2021年10月5日）

- 116) Sports Reference LLC. Basketball College.
(online) 1975-76 Indiana Hoosiers Roster and Stats.
<https://www.sports-reference.com/cbb/schools/indiana/1976.html> (参照日
2021年10月7日)
- 117) Sports Reference LLC. Basketball College.
(online) 1975-76 Michigan Wolverines Roster and
Stats.
<https://www.sports-reference.com/cbb/schools/michigan/1976.html> (参照日
2021年10月7日)
- 118) Sports Reference LLC. Basketball College.
(online) 1975-76 Rutgers Scarlet Knights Roster and
Stats.
<https://www.sports-reference.com/cbb/schools/rutgers/1976.html> (参照日
2021年10月7日)
- 119) Sports Reference LLC. Basketball College (online)
1975-76 Santa Clara Broncos Roster and Stats.
<https://www.sports-reference.com/cbb/schools/santa-clara/1976.html> (参照日2021年10月5日)
- 120) Sports Reference LLC. (online) Basketball
College. 1975-76 Santa Clara Broncos Schedule and
Results.
<https://www.sports-reference.com/cbb/schools/santa-clara/1976.html>

- clara/1976-schedule.html (参照日2021年10月10日)
- 121) Sports Reference LLC. (online) Basketball College. Tom Davis.
<https://www.sports-reference.com/cbb/coaches/tom-davis-1.html> (参照日2021年10月8日)
- 122) Sports Reference LLC. Basketball College (online) 1975-76 UCLA Bruins Roster and Stats.
<https://www.sports-reference.com/cbb/schools/ucla/1976.html> (参照日2021年10月5日)
- 123) Steven Loung (2021) New Raptors Assistant Gleeson adds simple, but effective approach to offence. Sportsnet.
<https://www.sportsnet.ca/nba/article/new-raptors-assistant-gleeson-adds-simple-effective-approach-offence/> (参照日2022年1月3日)
- 124) 谷釜尋徳(2013)1920～40年代のアメリカにおけるバスケットボールのドリブル技術の変遷-ボール・キープの手段から攻撃的な技術への発達-. 東洋大学 スポーツ健康科学紀要. 10号 49-63
- 125) 谷釜尋徳(2015)バスケットボール技術史研究に関する一考察-日本を対象とした研究の場合-. バスケットボール研究 第1号 87-98
- 126) 谷釜尋徳(2016)近代日本におけるバスケットボール研究の発展史-学問体系把握に向けた一試論-
- 127) THE OFFICIAL ATHLETICS WEBSITE OF THE

UNIVERSITY OF WISCONSIN-PLATTEVILLE
PIONEERS. (online)

<https://letsgopioneers.com/hall-of-fame/index> (参照日
2021年 6月23日)

- 128) 野老稔(1989)バスケットボールのフリーランス・オフenseの研究. 武庫川女子大学紀要. 人文・社会科学編. 第37巻 109-113
- 129) 内山治樹(1995)スポーツにおける戦術と戦術訓練の原理原則. 埼玉大学紀要 教育学部(教育科学) 第44巻2号
- 130) 内山治樹(2004)バスケットボール競技におけるチーム戦術の構造分析. スポーツ方法学研究 17巻1号.
- 131) 内山治樹(2007)スポーツにおける戦術研究のための方法叙説. 体育学研究 52:133-147 p135
- 132) 内山治樹(2012)バスケットボール競技におけるルールの存在論的構造:競技力を構成する知的契機としての射程から. 筑波大学体育科学紀要 Bull. Inst. Health & Sport Sci., Univ. of Tsukuba35:27-49. P30.
- 133) 内山治樹(2012)バスケットボール競技におけるルールの存在論的構造:競技力を構成する知的契機としての射程から. 筑波大学体育科学紀要 Bull. Inst. Health & Sport Sci., Univ. of Tsukuba35:27-49. P31.
- 134) University of Maryland(online) Men's Basketball Coach Gary Williams.
<https://umterps.com/sports/men-basketball/roster/coaches/gary-williams/528> (参照日
2021年10月4日)

- 135) University of San Francisco Athletic. (online)
Hall of Fame Rana Herrerias.
<https://usfdons.com/honors/hall-of-fame/rene-herrerias/43> (参照日2022年1月20日)
- 136) USA TODAY (online) Spurs' Popovich 'steals' strategy from Celtics' Stevens.
<https://www.usatoday.com/story/sports/nba/2015/03/21/spurs-popovich-steals-strategy-from-celtics-stevens/25132157/> (参照日2021年11月18日)
- 137) 吉井四郎(1987)バスケットボール指導全書2 基本戦法による攻防. 大修館書店 P.137
- 138) 吉井四郎(1987)バスケットボール指導全書2 基本戦法による攻防. 大修館書店 P.138
- 139) 吉井四郎(1987)バスケットボール指導全書2 基本戦法による攻防. 大修館書店 P.143
- 140) 吉井四郎(1987)バスケットボール指導全書2 基本戦法による攻防. 大修館書店 P.145
- 141) 吉井四郎(1987)バスケットボール指導全書2 基本戦法による攻防. 大修館書店 P.170
- 142) 吉井四郎(1987)バスケットボール指導全書2 基本戦法による攻防. 大修館書店 P.138-143
- 143) Zach Pekale (2020)1976 NCAA tournament:
Bracket, scores, stats, records. NCAA.COM.
<https://www.ncaa.com/news/basketball-men/article/2020-05-15/1976-ncaa-tournament->

bracket-scores-stats-records (参照日2021年10月7日)

144) Ziowa9(2017) B1G Basketball Historical

Perspective (Maryland) Dr. Tom.

<https://www.offtackleempire.com/2017/12/4/16731370/>

blg-basketball-historical-perspective-maryland-alum-

dr-tom (参照日2021年6月23日)

VII. 付録

表7 1975-76 Indiana Hoosiers ロスター

Player	Pos	Height	
Scott May(NBA)	F	6'7"	200.6cm
Kent Benson(NBA)	C	6'10"	208.2cm
Tom Abernethy(NBA)	F	6'7"	200.6cm
Quinn Buckner(NBA)	G	6'3"	190.5cm
Bob Wilkerson(NBA)	G	6'6"	198.1cm
Wayne Radford(NBA)	F	6'3"	190.5cm
Jim Crews	G	6'5"	195.5cm
Rich Valavicius	F	6'5"	195.5cm
Jim Wisman	G	6'2"	187.9cm
Bob Bender	G	6'2"	187.9cm
Mark Haymore	F	6'8"	203.2cm
Jim Roberson	F	6'9"	205.7cm
Scott Eells	G	6'9"	205.7cm

表8 1975-76 Michigan Wolverines ロスター

Player	Pos	Height	
Rickey Green(NBA)	G	6'0"	182.8cm
Phi Hubbard(NBA)	F	6'8"	203.2cm
John Robinson	F	6'6"	198.1cm
Wayman Britt	F	6'2"	187.9cm
Steve Grote	G	6'2"	187.9cm
Dave Baxter	G	6'3"	190.5cm
Joel Thompson	C	6'8"	203.2cm
Alan Hardy(NBA)	G	6'7"	200.6cm
Tom Bergen	C	6'9"	205.7cm
Tom Staton	G	6'3"	190.5cm
Lloyd Schinnerer	G	6'2"	187.9cm
Bobby Jones			
Don Johnston	C		
Len Lillard	F		

表 9 1975-76 Rutgers Scarlet Knights

ロ ス タ ー

Player	Pos	Height	
Phil Sellers	F	6'5"	195.5cm
Mike Dabney	G	6'4"	193.0cm
Eddie Jordan(NBA)	G	6'1"	185.4cm
Hollis Copeland(NBA)	F	6'6"	198.1cm
Abdel Anderson	F	6'7"	200.6cm
James Bailey(NBA)	F	6'9"	205.7cm
Steve Hefe	G	6'5"	195.5cm
Jeff Kleinbaum	G	6'2"	187.9cm
Mark Conlin	G	6'2"	187.9cm
Mike Palko	F	6'7"	200.6cm
Bruce Scherer	C	6'7"	200.6cm
Stan Nance	F	6'5"	195.5cm

1. 大会と価値

プロ(NBA)

毎年、ディビジョン I から卒業して行くプレイヤーがおよそ2000名程度と言われている。そのうち45名から55名程度がNBAへ行く。そして、200名程度がヨーロッパや日本を含むアジア、中南米、アフリカなどのプロチームに行き、1800名程度がバスケットボールとの関わりのない職業に就くことになる⁵⁵⁾⁵⁶⁾。バスケットボールの競技人口は、男女合わせて4億5千万人²⁶⁾。NBAの総チーム数は「30」で、1チームのロスターは15名と決まっている。NBAは、選びぬかれた450人が集うリーグである。ドラフト指名は、1チーム2つまでで、合計60人までしかそこには入れない¹⁰¹⁾。

アマチュア(中学、高校)

10月から翌年の3月までが、中学、高校のシーズン期となる。アメリカの場合、中学が2年、高校が4年制となっているのでワールドカップがU-16、U-18で大陸予選、U-17、U-19で世界選手権が行われこの学年割は非常にマッチしている⁵²⁾。

アメリカの場合誰でもバスケットボール部に入れるわけではない。チームの人数を12名+怪我などの問題で2名まで追加可能というリーグとして協会として規制している。セレクションがあり、うまくて体格の大きなプレイヤーがセレクションされる⁵²⁾。

アマチュア(大学)

アメリカの大学は、大学スポーツに関して注目度も高く、ビジネスとしても一目置かれる存在である⁵⁴⁾。殆どのゲームがテレビで中継され

ることもあり、強豪などはチームの運営資金にこのテレビ放映権料が含まれ、スポーツビジネスにとって大きな存在である⁵⁴⁾。

2. プレイヤーのリクルート

大学やNBAなど、多くのチームは、より強く、逞しいプレイヤーを獲得するために、多大な金銭を使用してきた。数年前からリクルート会社が創設され、多くのチームで情報が共有されるようになった。高校までは州大会で終わってしまうため、違う州で、同じような体格、プレイスタイルなどのプレイヤーがいても比べることができない。地域の番記者や、リクルートを専門にしている方の意見を聞き、チームや個人のランキングを付けている⁵⁵⁾。

大学にもランクがあり、強豪校がリクルートしているプレイヤーにディビジョン I 中位程度の大学が声をかけてもプレイヤーは来ない。リクルート会社がどこの大学が誰に声をかけているか情報を知らせてくれるため、金銭の無駄遣いをすることがなくなる⁵⁶⁾。

3. Coach

日本そしてヨーロッパなどの国は指導者資格が設定されているが、アメリカに関しては、私がコーチであるといえれば指導者になれる。ただし、雇うものが納得すれば。日本の場合はコーチの身分が教員であることが多い。アメリカでは、教員の立場コーチをする者も多少いるが、バスケットボールのコーチのみで生活するものが大半を締めている。大学のコーチへのキャリアアップを図る者が多い⁵³⁾。

4. League, Conference.

アマチュア(大学)

ディビジョンⅠ～Ⅲまであり、日本のような直列リーグではない。したがって入れ替え戦というものが存在せず、あくまで大学の大きさや力の入れ具合でディビジョンが決まる。ディビジョンⅠの場合、1万人程度入るアリーナを持つのが普通である。そして300を超える大学チームを有しているのがディビジョンⅠである⁵⁴⁾。

それぞれのカンファレンスが10月から翌年の2月末までレギュラーシーズンとしての大学間でリーグ戦を行う。その他にオーバーカンファレンスという形で、異なるカンファレンス同士の大学ともゲームを行う。この試合を基準にしてカンファレンス間の強さや、大学の強さがランク付けされる。全米選手権には、64プラス4校が参加し、トーナメントが3週間にわたって行われる。この時期をアメリカでは、“March Madness”と表現し、バスケットボール競技が最も盛り上がる。そして最終週にベスト4が集結してチャンピオンを争い合う戦いを“Final 4”と表現し、アメリカ中がお祭り騒ぎになる時期でもある⁵⁴⁾。

アマチュア(中学、高校)

レギュラーシーズンとその後のトーナメントという体制であり、リーグ戦の順位でトーナメントのポジションが決定される。トーナメントで上位にいれば、州大会に進出することができる。中学も高校も地域でホーム＆アウェーのリーグ戦を行う。父兄などを考慮してウィークデーの夜に開催され、少額であるが入場料を徴収する。レギュラーシーズンは、チーム力の向上と、個々の自立した人間形成を目的としている。州大会はトーナメント制であるため、お祭りのような盛り上がりを見せる⁵³⁾。州大会が、中学・高校で最後の大会となるため、プレイヤーは、

必死になって戦う。また、このトーナメントは、NBAや大学のスカウト
たちが最も注目している⁵³⁾。

謝 辞

修士論文の執筆にあたって、主査の倉石先生、副査の堀野先生、松井先生には大変お世話になりました。ありがとうございました。

主査である倉石先生には、バスケットボールのコーチング、歴史、戦術戦略など幅広い知識をご指導いただき、知識が深まったことで、よりバスケットボールを好きになりました。また研究や研究以外でも様々な助言を多くいただき、知識、教養を身に付けることの大切さと、楽しさも同時に教えていただきました。大変ありがとうございました。

また副査を引き受けてくださった堀野先生には、合同ゼミで多角的な視点から研究指導をしていただきました。ありがとうございました。

副査を引き受けていただいた松井先生にも、研究指導でお世話になりました。将来についてのご相談にも乗っていただき、執筆中に励ましのお言葉で支えていただきました。ありがとうございました。

また大学院進学を提案していただき、大学院在学中にゲーム分析、アシスタントコーチをする機会をいただいた、拓殖大学の池内泰明監督にも心より御礼を申し上げます。

津谷俊一郎